の妙理を發明仕候就中腦脊異體論惑病同原論の儀は醫說にも關係仕候儀にて苦心焦思眞修實效の上著述仕候儀に付人體心身中惑病の本原を究明仕候是唯佛道修證の接要のみならず醫學竝一切群類性命を保全仕候巨益と奉存候間何卒追々本朝は勿論四海萬國江も弘通仕度奉存候に付梓刻仕候間御不審の儀は　御下問次第可奉申上候且又先般奉申上候宗制の儀も佛法の衰廢一宗の混淆不堪悲歎獻言仕候次第に付當　御時節御差支の儀も御座候はゞ御說諭次第熟考の上猶又奉申上度奉存候已上、

己巳十月　　坦　山印

右建白書時得抄相添十月二十八日集議院江差出す面謁所に於て大津權判事面謁　朝廷破佛の儀にては決して無之候間宗門興行の儀は勝手次第の事宗制の儀は差支の廉も有之に付再考、

## (二)　贈醫學校書　(後號大學東校)

以手紙得御意候然は拙僧弱年の節在京中洋學士小森宗二なる者と理論致し佛法は虛誕多く實地の說なしと駁せられ拙僧答るゝ能はず深く慚憤を發し殆と寢食を忘ずること十餘年遂に佛法の大本身心の妙理を發明致候依之此度腦脊異體論著述致候に付入貴覽候此儀は自負自讚の儀にては無之承り聞西洋パテントの法有て有益の法を廣むと抑拙僧前後三十餘年精修實驗內觀外學の積功に依て發明致候儀にて是唯佛法修證の接要のみならず醫家必究の要事一切動物生命を保全するの巨益と存候間追々　本朝は勿論海外萬國へも弘通致度存候間梓刻流行致能々御看閱の上御不審之儀は御尋被下度候拙僧洋文を解せず僅に譯書にて見聞致候間可相成は此旨趣洋文に御直し被下幸便の節西洋諸國江御尋旁御布告被下度存候先者右申述度如斯に御座候已上、

己十一月日　　坦　山

## (三)　贈西洋諸國書

日本明治三年庚午孟春沙門坦山敬白、

五大洲中諸大明德足下、

予曾て佛氏の教理に依て佛法の本原人體心身の妙理を發明すると略腦脊異體論惑病同原論に述るが如し然るに吾邦古へより陳談腐說の佛法のみにて眞驗實地の法を信ずる者少なく承り聞西洋パテントの法あつて有益の法は弘むと故に先つ腦脊異體論數本を寄呈す、願くは諸君公明無私の活眼を以て宜く理論議評し苟くも採るべきあらば各國へも此法を弘通するとを許すべし唔語を欲する者あらば予洋文洋語を解せず故に和語漢語にて日本東京淺草廣小路書肆淺倉久兵衛まて書信を通ぜらるべし是れ予自負自讃の意に非ず唯有益の法を不朽に傳へんとを願ふのみ、

右の書庚午二月福澤氏に价して「ヘボン」及び西洋に贈り亞米利加人「タムソン」及「グリン」に唔語して西洋諸國に贈る閏十月大學南校「フルベッキ」に贈る、

## (四) 再贈大學東校書 (元號醫學校)

昨己十一月恐書相添腦脊異體論三本上呈仕り御衆評願置候得共今以不得貴報遺憾の至奉存候尤此儀は當春西洋諸大家へも申送候得共是又酬報無之拙僧も外用向にて此節出府致候へ共近々歸村致候に付右腦脊異同の儀に付篤と御懇談申度奉存候此儀は勉て理論を好み候譯にては無之是全く人體の至要醫學の大事件諸病の原由に關係候儀にて佛家にのみ潛用致候儀には有之間敢奉存候間追々西洋萬國江も流布仕度存候故錯誤無之樣仕度存候間御懇談申度奉存候此段不惡御評議の上貴報奉待候以上、

十月既望　　坦山

「庚午十月十七日使僧を以て大學東校に贈る寺口又四郎受取追て返答の由、」

## (五) 贈大博士佐藤氏書 (庚午閏十月廿一日政問第二章を添へ贈る)

未得拜晤候得共一翰呈啓陳者昨年來腦脊異體論並慈書相添兩回東校迄差上候條定て御高覽の儀と存候去朔日御私宅江御尋申候得共御不在にて不得貴晤遺憾萬々近比又或問一紙是又入貴覽候猶御熟覽の上貴報奉待候已上、

庚午閏十月

## (六) 再贈西洋諸國書 (庚午十一月)

日本明治庚午仲冬沙門坦山敬白、
五大洲諸大明德足下、

前者腦脊異體の理を發明するに由て十方に質問告知するに未だ酬報を聞かず思ふに是身體の至要邊に明了すべきに非ず釋氏の徒終身此に從事するも猶能實證の者は千萬中一二を得がたし若但死屍を解觀分析して其理を臆量するのみにては其妙を盡しがたし釋氏若之を實證すれば惑病の本源を斷ず是を實地履踐する所にして毫も虛誕にあらず若し疑難あらば書信を以て其意を通ず又は晤語を求めらるべし持に醫學の急務宜く等閑なるべからず予敢て議論を好むにあらず有益の法を泯沒せんとを恐れ更に紛々解說するのみ、

## (七) 贈福澤氏 (辛未二月七日或問第二の序を添贈る) 吉論書

春暖日加候處益御清寧奉賀候然は昨春は緩々拜晤大悅の至其節ヘボン氏及び諸洋へ拙著の儀願置且又東南大學校外々へも示談致置去冬貴宅へ御尋申上候處御國元へ御旅行の由殘念の至近日又々出府仕候處何方よりも回報無之則書信數通並或問一紙是又西洋諸家へ御懇談申度則呈上仕候間ヘボン氏外西洋諸家へも御序の節御懇談下され度奉鶴望候菓料楮弊一片御咲留奉願候不備　辛未仲春

右福澤氏返書の大意曰私杯は醫術に暗く御議論の旨不相分御取次も出來兼候ヘボン氏は横濱住居の儀彼地へ御越し直に御面談可然奉存候云々、

## (八) 民部省寺院寮江建言并時得抄献納

僧徒の儀に付建言三科并拙著献納

夫佛道は至妙の法に候得共其人に非れば行はれず其道を得ざれば至りがたしと雖も中古已來實學眞證の者少く迂怪不急の說起り近世諸道日月に盛んなるに及んで佛氏の徒依然として偷安傲惰の輩十に八九其巨擘と稱せらるゝ者も多く虛論空義を以て佛法となし或は奇怪妖幻の宗風或は衒耀蠱惑の實僧世利浮名の爲めに佛法の眞面目を蔽塞し所謂獅子身蟲の類恐くは上政治を蠹害し下民俗を

誣惑するに至らん恐拙常に恐る玉石俱に燒け龍蛇均く亡ぜんとを悲歎慷慨の至りに堪ず乍恐拙若奉献納候御不審の儀は御下問次第奉申上候尤此儀は集議院江も建言し大學東南校及西洋へも議談に及び候實地明驗の儀にて中古已來浮圖者流の空文虛義の類にては無之又自負自讃の意にても無之唯有益實地の佛法此時に泯絶せんとを傷み抱璞哭門の情に勝へず不顧撥斥奉献言候尚且僧徒の汙弊を救ふの法三科左に掲るが如し

第一　諸宗の大山巨寺人選住職可然の儀

張商鞅曰、今の浮圖百千中一人も古人の如くなる者なし然れども是佛法の過にあらず其人の罪なりと誠に當今諸宗の僧侶一同疲衰仕候と大山名場の主多く其器に非るより佛法の總敗と相成候問諸宗本山格寺觸頭寺は各宗に於て一同入札にて選住致候樣仰付られ可然奉存候

第二　諸宗の靈勸懲の儀

文明盛化の時に至り僧徒多く偷安懶惰因之譏誕無實蠱惑虛妄の毀謗往々見聞仕り朝廷江茂破佛廢佛の建議有之候由宜く大山巨寺の靈御試驗の上懲斥奬勵被爲在正宗實地の人法御取立相成可然奉存候

第三　僧徒の學校を設け勤學せしむべき議

佛法衰廢の本原は實學眞證の法衰へ候より種々の弊風差起候是其法の妄劣なるにあらず其學の衰るなり此弊を救ふの法は僧徒の學校を設け迂怪不急の學を廢し實地切用の法を精修せしむるの外佗なし當今寺院の御改正被仰出候趣付ては東西兩京に諸宗の學校を取立僧徒をして勤學せしめ學業の精粗により給料階級を定め其費用は此度諸寺院へ賜り候祿制の中を減し御分賜被仰付可然奉存候大凡僧徒の大祿は怠惰を招くの基なり尤佛學も諸宗共弊習數多有之自屎臭を覺へざる類多く相見候間餘道をも兼學せしめ候はゞ數年の中僧風自ら改革するのみならず御國用に相成候人材も出來可仕候總て僧徒も聖朝の赤子況や諸民の教導風俗美惡の係る所宜く其道の衰廢を御悲愍被爲在右之趣御改正被仰付可然奉存候巳上

辛未三月朔

寺院寮

下總山川　長德院坦山印

下執事

## (九) 贈腦脊異體論於加藤氏 (大學大丞)

辛未の夏異體論を加藤氏に贈て議評を請其返答に云是は當校所務とは旨趣違ひなれば議評致兼候由なり

## (一〇) 兵部省軍醫寮江建言 (腦脊異體論一冊添)

愚拙先年佛法の教理に因て人體の妙理を發明す今拙著一本を上呈す若疑難あらば具に陳言すべし苟も採るべきあらば醫學の巨益たるべし敢て諸賢の明察を仰ぐのみ

右壬申三月十日軍醫寮に於て石川氏櫻所二面晤之を渡す

## (二) 復贈石川氏書 (壬申三月)

過日は種々の高論悉く日新の妙理を承り深く感荷する所なり然るに愚論の人身究理西洋の說に戻り當今に容れられざるに似たり然れども愚說皆親踐實驗を專らにして暗說空談を用ひず故に今又其概略を演ぶべし予曾て西京に在りし時(安政年中)西洋學の名家小森氏宗二と稱す と理論し痛く貶駁に遇ひ深く慚憤を發し殆んど佛法に背んと欲す然れども佛氏の學も亦所傳ありて全く謊誕虛設にあらず故に殆んど寢食を忘じ精修數年大に佛法の大本身體の妙理を發明し病原惑本悉く掌裡を察するが如し是に於て醫家の書を閲するに得失相半ばす(支那の醫書は取るに足らず)其大錯二あり第一腦脊の體用を誤り第二に諸病の原由を知らず(諸病の原因平常に胚胎する者を云)是故に諸大家輩出して其學愈精く却て其眞を誤るとあり是予諸君の爲めに覩縷して止ざる所以なり第一腦脊の別體を論ぜば西洋諸家の究理書に腦脊は同一職務となす是身體究理中の一大錯誤なり予曾て定力を以て(定力とは佛法中に於て病原惑本を斷除する方法の名なり)圓髓を拔き(腦中に挿入する所の脊髓の上端)腦項接續の神經を斷ずるに(此條生理發蒙辯解に詳にす是亦中心は皆斷ず皮肉は斷ずるにあらず皮肉若し斷ぜば項上は滋養を妨げ項下は知覺を失つべし)脊髓以下は肥肉を增し腦胸腹の內部皆空淨す(圓髓を拔く

ば安政己未にあり接續の細神經を斷ずるは明治己巳也)而して後ち始て知る佛法は固より實驗實地の法にして虛誕空理にあらず蓋西洋の究理實驗は含密解剖分析等の學に因る抑人身活體の妙理は死屍上の景況を以て量るべからざること多し第二に諸病の原由を論ぜば和合心(予が再考心識論和合心の下に詳にす)の滯結是なり予諸病の原因を發明し予が學徒に諭すに凡そ棟修三四年にして病の粗體を除くべし(熱病、癆瘵、癲痼、等の原因)然るに西洋の理學病症論ずる精密なれども予を以て之を見るに恰も食を說て飽くこと能はざるが如し若其微細の說を要せば予之を說くことを厭はず且予利名を求むるに非ず勝他議論を好むにあらず唯有益實地の佛法誕空理の內に混沒して西洋諸家の精理愈密にして却て眞を謬り人體性命を誤らんとを慨歎し拙著に朱注を加へ又近來兩回西洋に贈る所の書並生理發蒙辨解一節を寫呈す御不審の儀は巨細御尋下さる可く猶且精細に御議評奉希候已上

追加

右愚論紛紜頗る淸暇を妨け候去ながら是人體の妙理病原の至要尤も醫學に關係す我法も亦之を基本とす宜く議論精確ならんとを欲す予元一儒生弱冠の比佛理の精妙なるを聞て出家して今日に至る若佛理用るに足らず西洋の學更に精實ならば予又佛法に背き洋學に歸すべし予頑老駑下なりと雖正を得て斃れば是止ん若其理の取るべきあらば理學醫術と雖佛理定力等兼學せずんば人身の妙理病原等恐くは明了なるべからず(然れども世俗僧徒の知るべき事にあらず)予之を熟議確定せんと欲す是先生を勞して止まざる所以也近日上參淸敎に浴すべし愚稿寫と御議評奉願候已上

贈ミュルレル氏ホフマン氏書 (二人隱逸人當今寓於上野)

ミュルレル先生の大名を承り涕唾に接し正斧を蒙らんとを欲し即ち拙著一本を上呈す明鑒無私高議亮照を希ふ(但腦背異體論一本添贈)

右壬申三月廿三日二人の寓居上野江訪ひホフマン氏並通辨佐野龍太郎氏に面會して之を渡す同廿五日再訪之龍太郎曰異體論飜譯及ひかたき由乃ち司馬從六位了海を訪ひ異體論を託して還る

## (三) 贈石黒氏書 (第一等軍醫 稱恒太郎)

過日は始て拜晤卒論御海恕下さるべく候然ば拙著時得抄、其他西洋諸國書二編
或問壹章、贈石川先生書、生理發蒙辨解一段、
右寫呈仕候御緩閲被下置度其内以參萬縷可得高意候不備

四月廿九日　　坦山

石黒先生

石黒氏復狀曰益御清穆奉恭賀候然は尊著の兩參一應拜見則返上仕候尚拜字萬
縷可申述候也

五月廿三日　　忠

坦山先生



# ○或問五章

坦山辯

## 第一章　佛法洋學の得失を論ず

或問當今皆西洋の學に心醉し、儒佛の如きは有れどもなきが如し、是人々新を好み奇を愛するより出るか、當今世間文化豈新奇を以て人を欺惑するを得んや、然るを師の佛法を固執し、之を主張せると甚しきは麻を擔ふて金を顧みざるに近からずや。

答曰、方今流布の佛法は皆古轍に依て建立す、故に錯誤多し烏焉の馬となるが如し、實地の妙法ありと雖、中古以來隱れて顯れず、西洋理學は日新實驗を旨とす、其錯誤は世人未だ知らざるが故に是亦隱れて顯れず、予今佛法の隱れたる實義を發明し、彼が未顯の誤りを糺んと欲す、恰かも一人にして數萬の敵と鬪ふが如し、死して而して後止んのみ、

問、何をか隠れたる實義未顯の誤りといふや

答曰、佛法中眞如佛性迷悟等の義を說く紛々たれども其實物を知らざるは隱れたるにあらずや、西洋の理學天地山河より草芥の微に至るまで實驗實効察了明白、然るに人體の究理に至て要器（腦脊）の體用を誤り病原を知らず、是亦隱れたるにあらずや、

問、何をか佛法中の錯誤といふ

答曰、大小乘の法皆一心上より說き來る、然るを、譯師經論師、各說分會、遂に茫洋として正據なきが如し、是皆心體惑本を知らず、其實據を失ふよりして錯誤を起せり、然れども眞實の要義明了ならば自餘の錯誤も正に歸すべし、是予が主張して止ざる所以也

## 第二章　腦脊異同の要義を論ず（此章醫博士佐藤舜海氏に屬する者）

或問、腦脊異同のと甚だ急務とも見へず、然るに師の盛に主張するは何ぞや、

答曰、天地間一切動物の類、人を最靈とする所以は、智識の機用他に異なるによる



のみ、今夫腦脊は智識性命の大本、惑病原由の係る所然るを西洋の諸學、皆實驗を根據どずれども腦脊の體用を誤解し、大醫先生と稱するものも或は熱病を患へ、或は癲癇や痲氣の持病あるものも見聞す、是實驗實效の名はあれども其本體を誤り病原を知らざる故なり、予實驗の大體を述るを腦脊異體論に云が如し、且試に予が社中癲痲等の病あるものに教諭するに、實驗の理を以てするに老弊頑痼の甚しきにあらざるは、皆悉く治す藥餌を假るに至らず、是豈急務にあらずや、

問曰、西洋の理學實驗精密、何ゆへに腦脊の體用を誤るや、且其誤る確證ありや、

答曰、是唯死屍を解剖して臆量を以て其理を究む、故に靈覺識智の實體を誤るのみ、其證は西洋大家の病原を說くに至て皆小誤あり、試に熱病の一種を以て論ぜば、病學通論に（第三局十七丁）諸家の說を擧げて其終りに斷じて曰く、之を要するに畢竟不測の因に屬するなりと、又合信の西醫略說に熱病の原由を說けども皆病原にはあらず、病緣と云べし、所謂病原とは妄心の廢退是なり、是古今醫學の大失といふべし、尙其微細の說は忽卒談話の盡すべきにあらざるのみ、

## 第三章　僧徒を呵責す今之を畧す

## 第四章　佛法國益を論ず

辛未の春三月、或問壹章を製して民部省寺院寮に献ず、辭曰、前者草莽の狂言三科)

(第一、諸宗の大山巨寺人撰住職可然議)

(第二、諸宗の輩勸懲の議)

(第三、僧徒の學校を設け勸學せしむべき議)

竝拙著奉献候處、蒙御一覽斧鉞の罪に及ばせられず、言路洞開の聖世億兆の多幸萬死報ひ難し、猶且排佛毀釋の說洋々として見聞に及び、若し國家之を御採用被爲在候へば、唯我佛者の不幸のみにあらず、恐國家の御不便共可相成、更に或問一章奉献納候、語曰、愚者も千慮に一得ありと、況や抛身捨命を厭はず、精修仕候儀に付、至愚極痴と雖も豈一得なからざるを知んや、

或問曰、子の所說の如き有益の法にもせよ、治國安民の法に於て所用なきが如し如何、

答曰、佛法の本意は治心解惑のみ、人々心を治めば垂拱して天下平かならん、豈益なしといはんや、

或問曰、當今富國强兵を以て治國安民の上策とす如何、

答曰、人々富國强兵を談じて其實に達せずんば恐くは至治を期しがたし、予が所見を以てするに、治國安民の本源は人心を和するにあり、人心和する時は强兵利器なしといへども猶至治を期すべし、夫心は萬法の原なり、故に一心正しければ萬法皆正く、一心邪なるときは萬法皆邪なり、故に苟も心を治るとを得ば之を文に用ゆる時は才識を益し固陋を破す、之を武に用ゆるときは智勇を加へ怖畏を離る、之を居常に用ゆるときは身心和樂にして惑病を斷ず、豈國家の巨益にあらずや

或問曰、當今富國强兵を談ずるもの非か、

答曰、非ならず、大凡窮して正を失せざる者は唯仁人義士之を能す、小民の如きは窮すれば必ず不善をなす、故に富國の法なきを得ず、且義國は横奪なし、必しも兵の强弱を論せず、暴國は侵掠を事とす、强兵にあらざれば之を待つと能はず、但人心を和するは本なり、强兵は末なり、若人心を失すれば强兵利器皆敵國の用をなす、何の

所益かあらん、故に人心を和するに至ては、佛法大に益あり、少欲知足より(今の價値多欲不知足なるは佛の法にあらず)無我無諍の法を敎へ因果報應の理を諭す、故に分外の希望なし四恩を談じて國王國土の恩を報ぜしむ、故に痴闇のものと雖も、尙能和意協同して暴戾に至らず、豈是益なしと謂べけんや、

或問曰、今佛を排するものは然らず、之を文に用ゆれば誕にして益なし、之を武に用ゆれば柔弱にして兵氣を挫折し、之を民に用ゆれば虛妄にして實義なしと、如何、

答曰、從前の佛者佛法の本意に達せざるもの其弊なきにあらず、若夫れ實地に達して之を用ひば其益前述の如し、其末を遂ひ其弊に從へば其害所說の如し、苟も其人に非れば道虛く行れず、譬へば武の如し、能く之を用れば治國の要道たり、能く之を用ひざれば民を害し國を亡ず、何ぞ必しも佛法のみならんや、

## 第五章　實證の本由を論ず

或問曰、子の所說の腦脊異體の義、たとひ明了なるにもせよ、世間に於て實驗信を取るに足らずんば世に傳ふべからず、如何、

答曰、夫內證の實法は言說の及びがたきところなれども、當今は人身の窮理精密なるかゆへに之を說くことかたからず、抑西洋究理の大錯は腦脊同體とみたるよりはなはだしきはなし、此理に於て明了ならば一切の惑本病原掌裡を指すが如きのみ、且予腦脊の接續を斷ずるに於て種々の明驗あれども先づ一證を說くべし、夫堅確猛利の定力腦脊の本原に至り、脊腿筋(所謂無明根)を拔擢するとき先腦胸腹にあるところの妄識を脫解す、然るに其筋數十條一齊に之を斷盡するに至て、支末の妄識脫解す、遂に腦脊接續の筋悉拔盡すべし、而して後腦は淨覺眞心の本府なるとを知り、脊腿は質形の元醋なるを明了なり、況や一切の煩惱苦本病原憂根恰も炎裡の霜の如く泯然として跡なし、但我身心此の如くなるのみにあらず、社中の者に論ずるに其用心と定力の工夫とを以てするに大抵三歲にして麁病の本原を治すべし、又持病等を受るものは凡そ三歲にして治すべし、但大老頑固なるは此例にあらず、唯此法を世間に流布せんと欲すれども之を信ずるものまれなるを傷むのみ、

# ○佛仙社學則解

佛仙社は余の數十年精究實驗に依り、明治十一年の創設にして、頭腦を蔵する無明と名つけ、脱するにあり、而して其原因は粘細渾の流動法にして、其大意は惑病の原因を解明の流動法にして、其大意は惑病の原因を解明

胃腹に集結するを煩惱と謂ふ、蓋し惑體は諸病の原因にして、諸病は煩惱の結果なり、其原因同一なるが故に煩惱根と名けし惑體は諸病の原因にして、諸病は煩惱の結果なり、其原

學ひ仙を修す、其實效を得るを要す、幾許ぞや、故に是に法を述ぶ、

修し、實驗明確ならんを要す、故に今其略解を述ぶ、

## ○第一則除集苦之結(即是妄識之積滯於腦胃腹而起愛悲苦惱者)

解曰、集とは五蘊の原質は其始め流動體にして、菜穀の發揮に聞ひ身心を成するが故に、心地(腦胃腹)に集結すれば愛悲苦惱を生じ、肺心胃腸等の諸病を發し(項背四肢)に集結す

れば痛痒冷熱腫瘤痼疾瘡瘍等の諸病を發れば、今其身心の集結を除き、滯毒なからしむの法、定力の外になし、定力は堅確剛強に非ざれば効なし、其結根を除くを解脱と名く、若し頓に最剛の定力を得て、無明の本根を拔去し疾跡を絶するに至れば、最勝覺者と名つけ、極樂世界主と稱す、是唯四頓大機の者能すする所なり、

## ○第二則斷惑病之原(即是陀那之和合於覺性而成一切惑病之患者)

解曰、是心地に在て惑障をなし、身處に於て疾病を生ずるの本原、即ち腰脊より醸發する處の黏液(經中阿陀識と名くる者)を絶斷せざれば完全無缺の身心を得がたし、其之を修する次序あり ○第一腹惑病 ○第二胃惑病 ○第三腦惑病 ○第四背脊病 ○第五全身病 是五科の次序を誤るべからず、大凡最先に集結する根本となし、最後の者を支末とす、其次序は最後の支末より斷じて、先の根本に溯り、惑病の根原を斷じ妄識流注の絶するに至るなり、



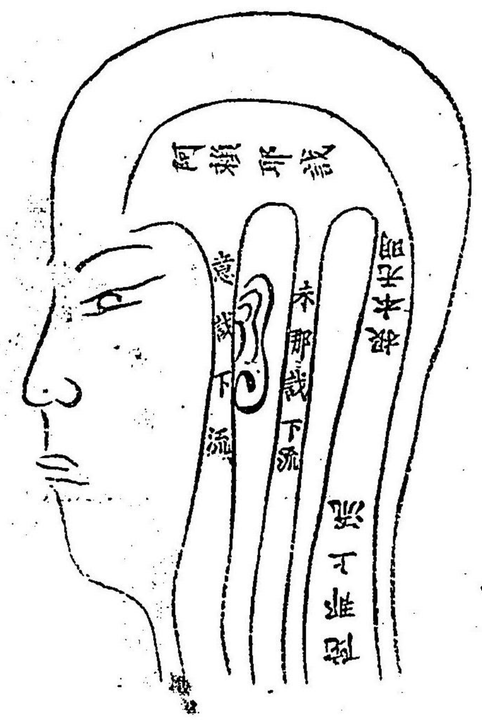
## ○第三則拔無明之根(即是和合之識體蔓延於腦胸而爲生滅之念想者)

解曰、無始の業緣に生じ心地に蔓延し念想の動搖起滅の本體、(覺性の寂照不動を染濁動する者)喩へば空中の煙霧淨水の埃塵の如く、心性の淨地を汚穢する者にして其之を拔盡り最剛至堅の力無畏三昧あるのみ、

## 明治戊子之夏

佛覺了安樂

仙健全壽康




佛仙教師原垣山撰

○佛教法原

(楞嚴經)

一、無始生死根本
二、無始菩提涅槃
元清淨躰

(二種根本)

(瓔珞經)

(七——見)

我、邪、斷、
常、戒、盜、
果、盜、疑、

心理

○一心

淳
眞如
菩提
涅槃

雜
生滅
無明
煩惱

○干涉學科

物理
心性
醫學
生理
含密
解剖

道德



(六——着)

貪愛、
癡欲、
瞋慢、

○心

集
道

法
規

道
履
踐

心用
智
情
意

心性
體
相

聲
醫方
因
工巧
內

明

心用
智
情
意
五根

心性
佛性
眞如
菩提
涅槃

○無明

五陰
五陰蓋
煩惱
結縛

陰蔽
積集
掩覆
苦悶
逼迫

涅槃經

(一 實 五 名)

- 首楞嚴三昧
- 般若波羅密
- 金剛三昧
- 獅子吼三昧
- 佛性

- 苦。
  - 憂悲
  - 逼惱
  - 澆散
- 集。
  - 聚黏
  - 蘊結
- 滅。
  - 清淨

○佛
- 教—能教、所教、
- 道—戒、定、慧、解脫、正知見、
- 法—性、相、體、力、作、因、緣、果、報、本末究竟等
- 學—行、果、

○心之初相 釋摩訶衍論 初相ハ即无明業相ノ初メヲ云

一 獨力業相(无明之業)

二 獨力隨相(本覺之用)

三 俱合動相

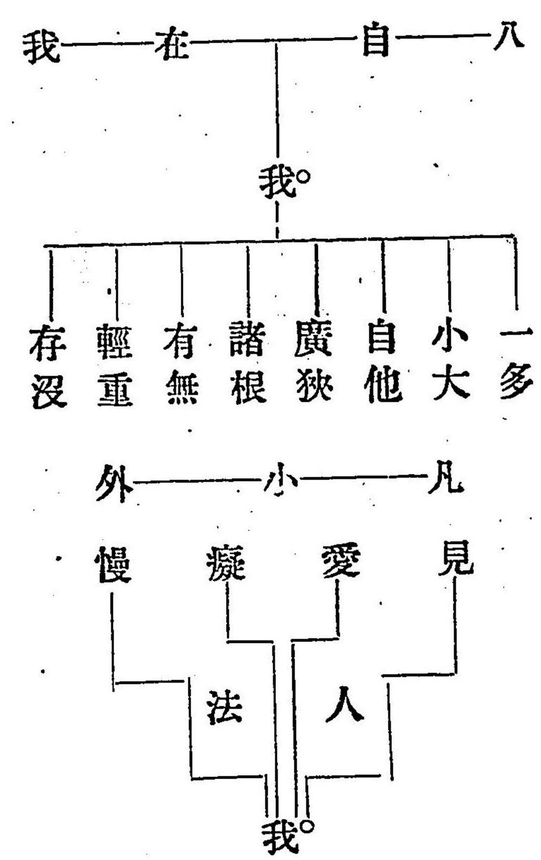


(十二支依心身總報三細六麁唯依心相)

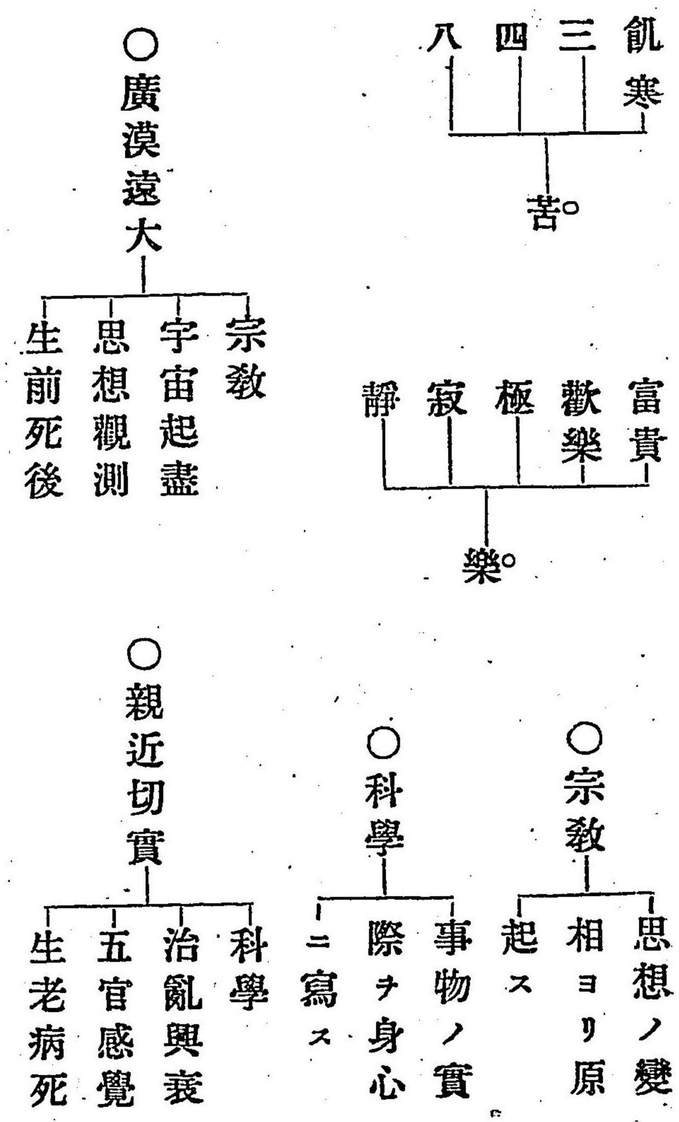
- 無明。
- 行
- 識
- 名色
- 六入
- 觸
- 受
- 愛
- 取
- 有
- 生
- 老死。

- 無明業相—集。
- 能見相
- 境界相
- 智苦
- 相續相
- 執取相
- 計名字相
- 起業相
- 業繫苦相—苦。
- 道。

十二支三細六麁ハ感躰生起ノ順序之ヲ斷滅スルハ逆行ス




我相ハ人法二執ニ依リ二執ハ必ス愛見痴慢ノ相ヲ發ス二執四相ナキ者ハ八種自在ノ大我波羅密ヲ得



## ○東京大學印度哲學科業書改正旨趣

明治十四年十月佛教を以て印度哲學と號し、本學正科に加ふべきに付、教科書の儀御議談の節、十三部を撰出し其中小生受持教科書、

維摩經　輔教編

右二部と定め、隔年學期に之を講授し來り候處、十六年九月輔教編を開演するに當り、生徒の請求に輔教編は平易にして講授を勞するに及ばず、更に高尚の書を講授せられたしと、乃ち大乘起信論を以て之に換ふ、是に於て察するに、本學の生徒は他學の餘力あるを以て其進歩の迅速なるを覺ふ、總て佛教は人機の智度に應ずるが故に當學期より

大方廣圓覺經　三十二紙　　大乘起信論　二十四紙

右二部に改正し、從前の維摩經輔教編を廢止仕度、大凡佛教の長所は一心を錬磨研究し、其妙處に達するに在り、其短所は荒唐濫漫、人間上の實理に乖違するに在り、蓋し其短所は傳記譯述の諸氏、其教を裝飾するに過るより起り、其長所は之を修得するもの少なく、而して右二部の經論は一心上精理實詣絶へて荒唐の說なし、是によりて小生本學負擔の分右二部に改正仕度、此段上申仕候也、

明治十八年八月　（教學論集）

## ○諸宗の管長に白す

前者に政府教導職を廢するの議あるを聞き、其之を評するもの一二にして足らず、本年太政官乎第拾號の發令を見るに諸評の當らざるを知る、余は以爲く、是佛教再興の時なり、夫れ教規宗制教師僧侶の分限稱號、寺院住持の任免、擧て之を管長に委任す、至重の大任と謂ふべし、其之を過する勅任を以てす、輕賤に非るなり、（經曰く自ら其身を降て乞も行すと鑒むべし、此に由て之を觀れば、諸宗管長大教師は宗教の尊位に居り化導の大任を荷負す、小少の及ぶ所にあらず、余輩の老朽迂慵なる、聊か佛教の眞際に微志あり、今此宗教の大變革に涖み、大に諸宗管長大教師に冀望する所あり、故に下文を陳す、若其用否は諸大教師の擇法眼にあり、（教學論集）

### 佛教の本旨

夫れ生前の原因、死後の結果の如きは宗教の大本秘藏にして容易の決了にあらざるなり、これを天造と云ひ、自然と云ひ、因緣と云ひ、不思議と云ふ、見知の卜度思想の模象に過ぎず、佛教の本旨を察するに、經云(楞嚴)如來藏中、性色眞空、性空眞色、清淨本然、法界に周徧し、衆生の心に隨ひ、所知の量に應じ、業に循て發現す、世間の無知、惑て因緣及び自然の性となす、皆是識心分別の計度、但言說のみ有て都て實義なしと、正に知る、因緣等の法は佛教の最上點にあらざることを、西天の鼻祖馬鳴氏、佛教の總因緣を說て云、衆生をして、一切苦を離れ、究竟樂を得せしむる爲めにして、世間の名利恭敬を求むる爲めにあらずと、誠に夫れ離苦得樂は佛教の本旨にして、小乘に、苦集滅道と敎へ、大乘に常樂我淨と談ず(又極妙樂究意覺と云)之を外にして佛敎を說くは不急の辯無用の察と云ふべきなり、

立宗の本意

蓋て諸宗の立宗開敎の大畧を察するに、恐らくは未だ究意覺地に到らずして宗祖たるものなしと保し難し、今や諸宗の管長大敎師は、各宗の宗制寺法を改正するの大權を有せり、願くば釋迦馬鳴の本旨に基き、不急無用の贅法を省き、自利々他に切要ならんことを要す、自利は離苦得樂なり、利他は拔苦與樂なり、(貧弱の苦を拔き富强の樂を與へ、病惑の苦を拔き健智の樂を與る類)若し或は世間の名利恭敬を求むるに汲々たらば、宗滅の期跂して待つべきのみ、

## ○小崎弘道氏の佛教に就ての疑問に答ふ

佛敎諸宗、所依の經論同じからず、(大畧八宗綱要に說くが如し)我が禪宗の如きは別に所依の經論なし、故に以心傳心、敎外別傳と稱す、即ち釋迦氏より直接八十九代、坦山に至る(傳燈錄、正宗記等の順次)其人に前後ありと雖も、其宗旨たる直指人心、見性成佛にして直ちに人々本具の心性に了達するを成佛となす、大凡佛敎の經論數千卷ありと雖も、其要は唯一心を治めるに過ぎず、一心其始處に達すれば一切經論皆無用の故紙のみ、古人(臨濟錄)(一)大藏經拭不淨の故紙と云ふ、亦漫語にあらざるなり、蓋し釋迦は釋迦の自性を大覺して釋迦たり、達磨は達磨の本禮を見性して達磨たり、故に我が宗正統の經文は、橫目竪鼻、戴天踏地、妄想自在經と名づくべきなり、

第二問の答

佛教は釋迦氏の前後と人類の東西とに論なく、本性の眞理實法に契當するに至るのみ、之を十方佛土中、唯有一乘法と云ひ、一切衆生悉有佛性と云ひ、亦宇宙間の大經卷と名づく、所謂天に日月星辰、地に山川草木、人畜蟲魚、釋迦氏之を實驗して菩提涅槃眞如法性と說くのみ、然れども一切動物の各不同、各思盡く異なり、彼の仁者は之を見て之を仁といひ、智者は之を見て之を智と云、或は天造と云、自然と云、是即ち佛教中三界十界・六凡四聖・六師・九十六種・各說同異、恰かも晴夜の星の如く、地球上の動植物金鑛の如く、億萬年を經るとも其一端を盡す能はず、所謂造物者の無盡藏とも云ふべく、微塵法界とも名くべし、其始めを尋ぬるに邈々焉たり、其終りを察するに茫々然たり、釋迦氏の前後固有假有の別あるにあらざるなり、

## 第三問の答

佛教各宗の起原は、「三國佛法傳通緣起」に出づるが如し、抑も「覆載間の動物無量なれば、其情・想・證・智亦復無量無邊なり、諸宗の所立亦復斯の如し、その同異や、得失や、實に叢々然たり、曠々然たり、强て之を分明瞭然たらしめんと欲せば、目之が爲めに盲し、耳之が爲めに聾するも、大虛空界の一塵、大東洋の一滴のみ、若し夫之を詳かにせんと欲せば、漆桶木杓牆壁瓦礫に問質徵驗して始めて其然るを知るべし、

○參考、右小崎氏が哲學會に提出せし三箇の問題は左の如し、

第一、佛教經文の歷史釋迦直傳の教旨を含有せらるゝ經文は何經なるや、之が正統なる經文たる證據を問ふ、

第二、釋迦固有の教旨佛教中、釋迦前及び當時の智學の之に混ずる者必ず少なからざるべし、又釋迦後佛教適當の發育と稱すべきもの、或は後世の學者が一己の識見を以て之に加へたる教旨も亦多かるべし、釋迦固有の教旨と其後に發育したる教旨と、釋迦前後に之に加はりたる教旨との區別を問ふ、

第三、佛教各宗派の起原區別及び關係各宗派、其源流とする經文は如何、各派其趣旨に於て相支語する所なきか、其關係を問ふ、

## ○鳥尾得庵居士に贈る書

久く涕唾に接せず、飢渴啻ならず、近頃貴著佛道本論を讀み因て詳にす、居士の佛道に於ける名相義解の理障と禪病の窩窟とを透過し、五法三自性八識二無我を覺了するを、眞實の佛道となさが如き、眞踐實着脚跟堅牢昔日の類にあらず、迂老をして隨喜讚歎止まざらしむ、殊に或難の辨數章の如き、利劒破竹の勢瞻望餘りあり、就中地獄往生の說、唯絕倒するのみ、坦山常に嘆ず、黃老は沒して唯其名相句義を傳へて宗旨を立す、支離摸象を免れず、願くは此本論名相義解の法師、軌轍輕剽の禪者を

して、熟讀喫驚、彼の五百の弟子の維摩に遇ふが如くならしめば、更に痛快なるべし、余近來修證圖解の著あり、固より他の嘷吠に拘はらず、居士若錯誤を見ば三十棒を吝むこと勿れ、

○尼金論

迂足齋先生、宴居有客、持一物請謁曰、是一大奇寶、先生能買否、先生憮然熟視、觀察問曰、金石乎、曰否、動物乎、曰否、植物乎、曰否、先生憤然曰、咄是何爲者也、客曰、比丘尼之睪丸也、先生憮然少間謂門弟子曰、噫汝等皆拜尼金漢、能識其實幾多也、

馬角齋評曰、嗚呼奇哉先生之文、能使人啞然而絶倒、悵然而扼腕、其以尼睪作尼金、寓意尤妙、



第三篇　雜部

# 坦山和尚逸事

## (一)　失戀は成功の媒となつた

坦山良作の頃、聖堂に學びつゝあつた時分のことぢや、某女と懇懃を通じ遂に杭儷の約束までなしたるに、多情なる彼女は、他と通ずるに至つて、良作の方にはやゝ秋風が立つようになつた、乃て良作憤懣に堪へず彼女を殺して恨を報ひんと決意し、一日(ある)接劍を呑んで彼女の家に到つた、折惡しくも彼女は他出して居らなかつた、乃て良作憤りの眦を張つて彼女の家に到つた、折惡しくも彼女は他出して居らなかつた、の家の床の間に某和尚の箴言を書きたる一軸が掛つてた、それが視線に映じたのである、乃て良作廓然省悟し、大に前非を悔謝し、急ぎ寓居に歸りて、爾來益志を堅め專心一意研學に餘念なくした、幾ばくもなく、業卒へ學成りて其後吉祥寺内の旃檀學寮に往き試講するに至つたのである、當時昌平黌出身として彼處に往つて試講するのは大に名譽とする所であつた、デ、所謂る具眼の士でなければ出來ぬであつたが、良作弱冠にして此選に當つたは意外であつた、是れも失戀が却て成功の媒となつたのぢやと、

## (二) 誕生佛を放下す

坦山まだ受具せぬて良作と呼ばれて參州青眼寺の達宗和尚の許に行き、禪宗威儀作法ても見習ふと云ふのて、暫時食客して居られたのてある、或年の四月八日、釋迦の誕生會に遭遇した、デ達宗和尚は至つて儀式ばる人てかゝることは極めて嚴肅にやる方てあつた、乃て前日から本堂の御莊嚴どもやらせ、華堂も式の如く莊飾し、并して其中に例の誕生佛の尊像を安置しやふといふのて、ワザ〳〵京都て鋳させた新佛像をと云のて、京都から送つたまゝ箱入にして大切に床の間に奉安して置いた、達宗和尚良作に持つて來よと申付けた、スルと良作ハイと提つて其處に往つて見るといと嚴かに奉安してある、平素豪放不羈なる良作ドン行きなり其をへン抱いて持つて來たが、如何なるハヅミてあつたか彼の誕生佛を椽側へズデンドーンと抛り擲げた、所が達宗和尚も其の物音に驚き良作に向つて此坊主何をすると叱責すると、良作ドン敢て周章狼狽の態もなく、從容莞爾として、ヘイ唯今御釋迦が生れたところでござるとスカサヅやつてのけた、流石の達宗和尚も遁箇の答には何んとも二言なく笑つて居つたそうてある。しかし斯一言到底尋常凡僧の言ひ得る語てはない、デ達宗和尚の明眼コハ拙僧如きものゝ下に置くべき器にあらずと、看取し、直ちに宇治の興聖寺同天和尚の會下へ紹介してやつたとのこと。

## (三) 臀を炙りながら雲板を鳴す

雲板と云ふものは禪宗僧堂て大衆粥飯の時に打鳴して大衆を食堂に召集する用に備へてあるのて、多勢の雲水等が當番にやるのてある、一日坦山に其番が當つた、ところが折惡しく寒烈肌に徹すてふ朝てあつた、デ坦山以爲らくだ、アーかゝる寒風肌に徹する酷寒に廊下に立つてカンカンチャン〳〵とやつて居られたものてない、要は音がして衆僧が集まれば足るのてあるからドコに居つて鳴すも差閊なからうと、彼の雲板を引ハヅして竈の前に持つて來て臀をアブリながらカン〳〵チャン〳〵とやつて居つた、すると回天和尚巡堂に來て見て、サテ平生よりも別の方角に當つて雲板が鳴るからコハ變ぢやわいと思ふて庫裡に往つて見るとコハソモ如何に坦山は竈の前に臀をアブリながら、カン〳〵チャン〳〵とやつてるか

ら、回天和尚非常に呵責して後來を誡められたが、しかし回天和尚の心中にはコハ凡庸ではないと看取した、一日回天和尚に獨參があつて、眞劍勝負の商量問答をやつた、時に回天和尚坦山に曰はるゝには、其方は驚くべき亂暴漢ぢやが、併し如何にも高き心眼を具へ、卓越たる見識を有して居るには驚入つたと、遂に印可せられたと。

## (四) 懺謝とは牡丹餅に有りつくものぢやナー

當時大阪に覺巖和尚と云ふて、彼の松代の名物男佐久間象山と鎬を削つて道義を論爭した程の傑物であつた、所て坦山既に回天の印可を得たて、一番彼の道場を破り彼の鼻柱を挫いてやらうといふ勢て、覺巖和尚の道場へやつて行つた、幸ひソコには惡意な道友が居つたて、其に頼んて直に獨參を許された、時に甚た惡辣なる商量てあつた、曰く、佛に法報應の三身ありと、未審法身の佛は飯を契するや如何と、覺巖和尚大に怒りて、此亂暴漢と叱咤したが、中々默て居らぬ、ます〳〵反問して和尚を追ひ込んだ、和尚非常に立腹して遂に不得要領に其場は了つた、坦山は和尚の火のやうになつて怒るも、屁とも思はぬて平氣の平左て居つたが、會中惡意の道友等が云ふに、此まゝて立分れとなられては後て困るて、老師面前に懺謝して歸つて呉れろと切に頼むだから、氣は進まぬかつたが、彼等の頼みにまかせ、翌朝和尚面前に進て懺謝した、スルト和尚も前夜の立腹は釋然として解け、剩さへ牡丹餅の馳走をして優遇した、乃て坦山思はず吹き出して、呵々大笑して、ハ……懺謝とは牡丹餅にありつくものぢやナ——と。

## (五) 東山の蝸廬庵主

坦山、京阪の間諸方の知識に歴參し、風外和尚の門にありて、奕堂、環溪、藏雲等の諸公と同參にて、頗る造詣する所があつて、後叡山に登りて、律部の研究に熱衷し、其奥を窮めたて、山を下り地を京都は東山にトし、自分から方六尺の車上屋、僅に雨露を凌ぐに足るものを造りて、中を四區に分劃し、一區は居室、一區は書房、一區は庖厨、一區は雜具の室とし、幷して前方に日月の窓を穿ちて明をとり、之を東山隨時適意の處に曳きもて行き、开して書を讀み經を寫し、若し食糧盡るときは、市に出てゝ托鉢

し、一日の糧を得れば蝸廬に歸りて、修學精研に餘念なくかくすること數年。實に天地を一小蝸廬として悠々宇宙の眞理を研鑽せられたそうである。其苦學や實に知るべしだ。

## (六) 時の關白を罵倒して癲狂院に入れらる

坦山、東山の蝸廬庵から這出して、洛東白川の心性寺てふに住職となつた、此寺は關白家の祈願所である、て時の關白公に親近する事が出來た、かしかし、坦山は決して權貴に媚び富豪に阿諛するやうな俗物てない。

一日公と大に時事を激論して公を罵倒した、凡そ當時位人臣の最高にある關白を罵倒するものは罪死に及ぶか、輕くして遠島流刑に處さるゝのてあつた、幸ひにして關白家の太夫某なるもの、元より坦山の性格を知つてるものてあるから、甚だ其人物を惜みて、癲狂者てござると公へは申上げ、坦山を北岩倉の風癲病院へ入れた、而して後に江戸の法類を呼び寄せて江戸へ護送したのて事なきを得たのてある。時に坦山大津まて護送せられこゝにて漸く自由の身となり筆硯を需め次の詩歌一首つゝをものして關白公に送呈した、

蓋覆乾坤笑女蝸、　或昇山岳或泥沙、　隨風隨處無常態　時起甘霖利國家、

と、其歌に

天つそらこゝろにまかす浮雲の風のいづこにふきさそふらむ

題して雲に詠ずと、これより自から狂翁と號して生涯狂を以て終らると意に決したとある、かしかし關白公も之を見て、非常に坦山の人物を惜まれ、アー拙者が惡るかつたと……

## (七) 無一物にて江湖會を修す

江湖會は禪宗の儀式中ても非常の長時間の法式て九旬安居と云ふて、九十日間四五十人若しくは百名に近い雲水が集つて修行してるのてある、てあるから隨つて其の費用も多大てある、所が坦山は無一物て此大法式を嚴修し四五十人の雲水を九旬間活して貰いたてふのてある。何と凡人には迚も出來ぬことてあらう。ソハ例の心性寺にある時の事て、心性寺は極めて貧院骨山て一物の貯もない。一粒の飯

米も餘剩なく、眞に洗ふが如き貧乏寺である。然るに初會の江湖會を修することゝなつた、ソハ兼て同參の環溪和尚が、當時泉州堺の涼蔭寺に住し、衆僧の四五十人も接して居つた、或時坦山に初會の江湖會を修してはドーぢやと勸めたのである、乃て坦山の曰はくだ、尊公さへ助化して呉れるならやらうと、環溪和尚曰ふにはソハ勿論及ぶ丈の助力はしてやると、乃て愈々やるときめて、日限になつて西堂和尚(環溪)が四十五人の常詰の雲水を引率してやつて來て見ると、入寺だと云ふのに何の用意も準備もしてなかつたのみならず、平氣の平左ですまし込んでるから、西堂和尚も大衆も唯呆然としてた、良久うして西堂和尚あまりのことに默しかねて云ふには餘りといへば不用意てはないか、兎も角、江湖會を修するといへば一會九旬、四十五六名の衆僧に粥なりとすゝらせにやならぬてはないか、然るに來て見れば、米一粒、味噌一臠も用意してゐかぬとは、全體ドーする積ぢやと、坦山言下に應じて、ウフン法憧は私が取るから、江湖會は君がおいて呉れるのぢやと、這箇平然たる態度には流石の西堂和尚も驚き入つてしばし無言てあつたが、しかし今となつて彼れ此言ふも遲入刻ぢや、翌日から毎日大衆一同て托鉢して漸く九旬の結制圓成を得た、所が坦山平然として曰く、これてこそ眞の江湖會ぢやつたわいと。

## (八) 淺草奥山の賣卜翁名札の代りに芭蕉布を垂る

豪放不羈、直言徑行なる坦山、維新の後間もなく、其の宗の管長の爲めに嫌はれ、遂に逆遇せられ、僧籍脱却の身となつた、のて塵俗に混じて淺草奥山に賣卜師と化けて笠竹をツマグッて居つて、纔かに糊口の資を得、つゝあつた、此頃の事てあつたが、本願寺の法主光尊上人は大に坦山の人物を惜みて其宗の學寮に聘して教育の事を司どらしめたのてある。這箇の賣卜翁の居宅と云は、曩日東山の蝸廬庵にも均しき六尺九尺位の小屋に起臥し、門札も掛けず、入口には三尺巾の芭蕉布に次の句を筆太に自書して垂れてあるのみ、乃ち其句に

坦平之山、　險奇難究、　良巧之作、　儘伺不鑠、　性痴名隱、　乍住乍走、　姓尼乾子、
自號裸畜、

## (九) 賣卜翁一躍して帝國大學講師となる

淺草公園裡、幽棲纔一間、不須買山谷、占得閒中閑。

と自ら詠じて恰も東山の蝸廬庵のやうな所に住んで居つたが、如何せん桃李不言花時自ら蹊をなすとの道理で、這箇の老逸民も時に大學總長の知る所となり、遂に帝國大學印度哲學の講師を囑托せられた、時の總長は文學博士加藤弘之氏であつた、坦山の令名を聞き、單身淺草公園に到り諸方搜索したが中々容易に見當らぬ、乃て進で奥山に尋ね入て見ると例の小屋に芭蕉布を垂れてあつたてこれならんと、刺を通じて垂布を捲りて見れば本尊の大入道は洒々然として横臥してた、總長は直ちに來意を陳べて大學講師に囑托したが、敢て喜べる色もなく平然として此榮を擔ふたのである、これが帝國大學に佛經講筵を開かれた嚆矢であつた……

## (一〇) 坦山も木石でない

豪放不羈、奇言奇行、毫も忌憚なき坦山、時に凡庸の口にし能はざる言を吐きては、人をして驚倒せしめるのであつた。曾て左右の門弟子等に語りて曰く、余も壯年時代には隨分の好色家であつた、开して失敗否な失戀したこともあつたが、齡四十一歳に至るまでは、ドーも淫慾を絶つことがてきなかつた、坦山も木石でないから今でも六十七十の乃字腰の老媼よりも、春色あざやかなる美人を見る方がドーやら快感を覺るやうぢや……かゝる言は坦山にして始めて言ひ得らるゝてあらう、世の假面的智識や似非高僧などには、トテも言得べき語ではない。

## (一一) 雲照さんも酒　飲めねば死佛ぢや

明治佛敎界の四傑に數へらるゝ釋雲照律師は極めて頑固なる舊式佛敎學のモデルと云つてもよい位てある、隨つて戒律を嚴守するとも恐らく明治の佛敎界に唯一人と言つても過言てはなからう、一日這箇磊落不羈の坦山と戒律嚴守の雲照と會見した、所が雲照は飽迄戒律を楯にして手に酒器だも取らぬと云ふ、乃て坦山呵々大笑して曰くだ、可惜乎々々々雲照さんも酒を飲めねば死佛ぢやわいと。一座呆然として坦山の直言には驚入たそうてある。是坦山の眼より看取したならば、雲照律師の如きは憐れにも戒縛を解脫することができぬて、アタラ天眞の自由を得ることができぬて枯木のやうになつてるは死佛漢てはないかと勘破したのてあらう。

## (三) 宗教聖典は小說的ぢや

坦山曾て門弟子に語つて曰ふに、總て古今東西の宗教には聖典とし崇拜し來りしものがあるがあれは皆小說的ぢや、佛經にまれバイブルにまれ、將たコーランにまれ皆そうぢや、聖經萬卷數億言あつても、眞理は唯一に歸してるぢや、所謂る萬法歸一ぢや、譬へば萬解の砂中に眞金を掘するやうなものぢや、一休が釋迦といふいたづらものが世に出て、多くの人を迷はするかなと云ふたが全くぢや、汝等も活きたる眼を開いて讀破せよ、聖典に迷はされては駄目ぢやぞ。

## (三) 行誠の死牛溲に報ゆるに最後屁を以てす

坦山積年研鑽の結果、遂に破天荒なる自論を發表した、其れは彼の心性實驗錄である、從前の佛者は皆依文解義に陷つて、佛教の眞理を發見せぬ、て坦山出て、先哲未言の新研究より此著をなしたのて行誠は批評したのてある、坦山は自性法體實驗明白ならんと主張し、行誠は經論の理義明辨顯了ならんを唱道し、坦山は無始本有の自性に依つて立論し、行誠は經論の典據に依つて批判し、各鎬ぎを削つて辯難攻撃したのてある、これ明治聖代に於ける二傑僧の戰爭てあつた、乃て行誠は自己の批判を裁して末後に次の一偈を打して坦山に啓した、

頭腦久悶亦釀病、試須毘盧舊髑髏、配劑任君丸與散、且加一盞死牛溲

と、乃て坦山も亦行誠の批判に對して再辨し、并して次の如く言ふてやつた、師法の爲め親切なる、予毎に歎伏する所、今予が所述に於て扣擊甚だ洪劇、細鐘微器殆と百碎せんとす、止むを得ずして一二の麁書を發して法誼の深志に酬ふ、又恰も放屁蟲の打撲に遇て、最後屁を放つが如し、惡臭四邊を薫勳すべし、老師の如きも恐らくは鼻を掩ふて一嚏を發せんのみ、偈曰

止々不須說、我法妙難思、試曾說一分、舉世皆驚疑、
火裡之蓮水裡燈、與天成地々成天、有人若問解何道、爲報牛屎馬糞禪。

## (四) 佛前にて肉鍋を炙る

一度び捨られた坦山も、また宗門に拾ひ上られて、小田原の最乘寺に住すること

いなのだ、かしかし、坦山には甚と迷惑だッたらう、イヤ豪放磊落の御本人には敢て迷惑とも何とも感じなかつたであらう。隨處自在の活達人で、最乘寺に住したから改まつてコーセにやならぬなどゝ之乎者哉するやうな實僧でないから、所謂る鬧市中にあるも、山谷間にあるも、別事なしだ、であるから此調子でもつて何事も遠慮會釋なくずん〳〵やつつける。一日佛前に大胡坐で肉鍋をッつついて舌皷をならして酒を飲んだと云ふとてあるが、此等は實に俗僧のできぬ作略である、彼れ丹霞が木佛を燒いて臀をあぶつたてふ活作略も如何であらう。

## (一五) 坦山は何時信用を得たか

是れも最乘寺住職中のことであつた。餘り無遠慮にして、時に或は肉鍋もよろしく、時としては大ジマのドテラに兵子帶で堂前に逍遙してるてふ有樣、最乘寺は道了權現の祈禱所だから日々の信男信女が纖ををる如く參詣し、或は祈禱を願ひ、或は讀經を請ふものひきも切らぬ程である、然るに坦山かゝる風采であるで侍僧や執事等が大に心配して、或時竊かに坦山の袖をひいて諫むるには、御前も御覽の如く當山は神聖なる祈禱寺でありますから左樣な御風采では御信用が墜ちまする と、坦山言下に呵々大笑してハ……この坦山はイツ信用を得たか……(得ぬ信用を墜す氣づかひはないとの意)

## (一六) 無禪の長者子

坦山或時非常の貧困に迫り、殊に獨身者であるから、衣類のホコロビ手づから紙のコヨリにて綴てるやうなる有樣であつた、であるから禪一卷有たぬで、無遠慮に露出してる、所を道友の透禪氏が一日之を見て問ふていふに、君の股間に出現するもの這箇何とかなすと、坦山平然として答へて這箇はこれ無禪の長者子と透禪哄笑して去つたが、後日に至り一條の嚏鼻禪を贈り與へた、乃で坦山直ちに返禮の詞に代へて次の七絕一首を書いて送つた、其詩に

曾恨無禪長者子、今嗤有禪困窮人、細思塵事堪捧腹、千里寄君欲消嚬、

## (一七) 奉加帳の序文

某僧かつて本堂再建しやうと云ふので、一日奉加帳を携へて佛仙會に到り、坦山に序文を乞ふた、スルと坦山直ちに筆を取り題して、次の數文字を書いて與へた、曰く、「本堂を建つる金のほしきもの也」と、某僧も呆然として無言にして去つたそうだ。

## (一八) 坦山の散髪を罵るものに答ふ

二十年前にあつては坦山は頗るハイカラ的であつたかもしれぬ、天下一般僧侶は方袍圓頂でなければならぬもの、若し之に背けば僧侶でない、否佛の弟子でないと固信してる時に當つて坦山獨平氣で散髪、しかも洋服を着た上に袈裟をかけてるのだから、世の凡僧等始め衆人が擧な外道ぢや、イヤ婆羅門ぢやと罵つた、坦山曰くだ、法衣は元來支那以來の折衷服ぢや、決して佛衣ではない、袈裟丈は佛衣ぢやて袈裟の外は何を身に纏ふとも佛の叱りは蒙らぬわいと、开して散髪になつた所が道友某が佛僧の著髪は宜しくないと忠告した、スルと坦山言下に次の一絶を打して返答した、其詩に

不須虛飾求眞、　天授嬢生即本眞、　垂髪僧容君莫怪、　寒山狂士是前身。

## (一九) 廻轉する地の球は須彌山ぢや迚も止まぬ

明治十三四年の頃であつた、佐田介石てふものがあつて視實等象儀てふものを拵つて佛教にいふ須彌中心說を主唱して地動說、即ち地球廻轉說を攻擊し、一時は全國を風靡するの勢てあつた、所が佛教家ても見識のあるものは相手にせんかつた、彼の行誠ても奕堂ても一擊の下に破した、一日坦山の廬に來つて例の須彌說を唱道し坦山に贊成を求めた、スルと坦山呵々大笑していふに……釋迦の佛法は決して些々なる須彌の有無て價値の高低はないよ、祖門下ては却てソンナ須彌などは蹴倒するのぢや、一體全體コノ地の球は天體中の一小部分てそれが他の關係者の非常の引力によつてマハルのぢやから今更如何なる須彌を以て來てもコノ廻轉り出した地の球は到底喰止らるゝものじやないよ、ソンな骨折損のクタビレ儲けは停止たらよからうよと。介石苦笑して去つた。

## (二〇) 君はまだ彼女を抱いてるか僕は彼時限り

坦山壯年時代に環溪、奕堂、藏雲、等と同參にて諸方の知識を遍參し周遊したが、或時奕堂(或は棣仙とも云ふ)と同道して行く途中、狹き間道を通らうとした、所が泥濘膝を埋むといふ惡道であつた、然るところへ向ふから二人とも思はれる少女がやつて來たが、此方からは大入道か二人りしかも大きな荷子を負つてるものがやつて行くので彼少女はよけるにもよけられず、顏赤らめて躊躇してをつた、スルと坦山氣の毒に思ひイキなり、彼の少女をムヅと抱いて道のよい方へよけてやつた、時に後方にひかへてた奕堂は元より嚴格な方正家であるて坦山のコノ所作を見て眉をひそめて居つたが、道の數町も歩んだ頃坦山に向つて、君は甚だ浪漫ぢやないか、禪僧家は女人などあんな不淨なものには手も觸れぬと云ふに先刻の樣な亂暴なことをしては甚だ以て禪僧家の面目にかゝはるぢやないか以後はチト謹むがよからうと云ふと、坦山からく〳〵と笑つて曰く、ハ……君はまだ彼の少女を抱いて居るか僕はアノ時限りぢやはいと平然……(此話昔し德翁了高の逸事に似てるがしかし聞くがまゝ此に記した)

## (三) 松崎大尉劔を拔いて坦山の頭上に擬す

松崎大尉は日清戰爭の始めに韓國安城の渡て名譽の戰死を遂げた人てある、大尉は肥後熊本の藩士て、深く心を禪要によせて、濟洞の知識に參じ、得る所があつた、て或時坦山に相見して這事を敲かんとして來た、坦山呵して云ふ這事太だ容易ならぬ、速に去れと、大尉曰く、生死事大無常迅速、小子未だ安心立命の地を得る能はず、願くは、老師大慈教示を垂れよと其言太だ切てある、坦山云ふ、古人云はずや禪は口の詮する所にあらず、識の識る所に非ずと、されば禪は口耳の學にあらず汝もし禪を修めむと欲せば須らく去つて靜坐工夫せよと、大尉乃て去つて坐ずると良久しうして省發するところがあつた、デ來つて所見を呈露した、スルと坦山叱していふ、皮相の見、禪何ぞ言語の上にあらむやと、大尉是に於いて劔を拔いて奮進し、坦山の頭上に擬して曰く、正當恁麼の時如何と、時に坦山正に喫煙して居つたが、言下に答ふ。煙管依舊吐濃煙と、大尉劔を收めて再拜して曰く、我今日這事を了ずと、直ちに出去らんとした、スルと坦山蹇直に大尉の胸襟を取つていふ、生哉全機現死哉全機現何

論去來說生死と、大尉いはく、日沒西山歸路遠、勿勞尊翁老疲身と、坦山微笑して其手を放つた、爾來數々坦山の爐鞴に入りて、遂に覺仙門下の獅子兒と稱さるに至つた。

## (三) 人の年を問ふに答へて

坦山老いて益々壯なりで、童顏銀髯一種言ふべからざる風采があつたで或時某氏が老師はイツも御壯んてござるが御年はど問ふた、所が直ちに筆を取つて次の文字を並べて見せた、其文に

明治己卯冬、臘月第五日、甲子一周前、坦山此世出、と、是れは以前坦山六十一の十二月五日に道友を招いて還曆の謎を開いた時にものしたのてあつたが、數日の後某氏の問に應用したのてあらう。

## (三) 己れの佛法は有難屋ぢやないわい

坦山最乘寺に請されて氣は進まねど時の事情止むを得ぬて其請に應じて、曾逃三俗受幽獨、醜爲塵緣、作俗僧、白日天邊車蓋遠、八風狂浪任飛騰、との述懷ぢイャながら入山したが、サテ祈禱佛敎だの舊式佛敎だのて如何にも坦山の氣に喰はぬことばかりてある、一日信徒の某が來つて御前は此山に入られて既に數月未だ何等の說法あると承らぬが、今日こそは何ぞ佛法の有がたきことを御きかせくだされと、乃て坦山カラ〳〵と笑ひ、己れの佛法は有難やぢやないわいとソッケもない言はに信者も二の口開かぬて去つたとか、かゝるとに數々出クワすから此有難や祈禱屋に腰は据はらぬて、遂に

曾號逸郎逸不能、爲僧爲俗又爲僧、更爲逸老思爲逸、亦是傀儡三四棚。
解脫出家似出家、蕭然斷盡利名枷、爲僧爲俗亦游戲、春苑恰如弄百花。

と、這箇有難屋も弊屋を棄つるが如くにして飛び出して了つた。

## (三四) 己れの學問はブチ猫の如し

坦山時々奇言を吐いて、世の佛者の口にせざる言のみをいふて、一日某生坦山に問ふて曰く、老師の佛敎は從前の佛者の說く所とは大に異なるやうてござるが、全體老師の學問は如何なる學問てござると、坦山答て曰く、ハ……左樣己れの學問

はプチ猫のやうぢやわい、某生又問ふて曰く、其れは如何なるとてござると、己れは醫學もやる、漢學もやる、西洋の哲學もやる、佛學は勿論のこと、蘭書によつて生理學もやつた、動植物學もやつた、てこゝに一疋の斑猫が生れたのぢやわい。汝等も是れから眞の活佛敎を擧揚するには、迚も小說見たやうな舊式佛敎にのみ固着して居つては駄目ぢやぞ、宜しく斑猫的に百科の學を修めて開して佛敎を活かして呉れねばならぬぞ。

## (二五) 死を豫知して臨終の報告書を認む

坦山自ら佛仙社を結びて、佛仙論を主唱し、開して常に宣言して若し予の主唱する所が虛誕妄說であるかどゝかを知らんには、先づ予の臨終の時を見るがよいぢやと、果せる哉其臨終の際、自から死期を前知して知己道友等に報告された、即ち明治廿五年の七月廿七日に至つて將に圓寂せんとするに際して、侍者に筆硯を命じ開して自ら筆を執りて、

「拙僧儀即刻臨終仕候間此段御報知に及ぶ　人間ハ元氣がなきやうぢやん

と、葉書に認めて投函せしめ、靜坐冥目して化を遷されたと、此間の消息は、常隨の上村智證師や、南澤亨安師などが熟知の筈である。豪放不羈、磊落洒脫、奇言奇行を以て一生涯遊戲三昧にあられたる坦山、其終末までもかゝる大風流を以て世を辭されしは眞にこれ覺仙の覺仙たる所以であらう。

# ○追慕錄

## (一) 原山禪師の遷化を悼む

明敎新誌主筆

敎界の氣運方に一變の期に際す、又應に一變せざるべからざるの秋なり。顧ふに中興維新の後、政令新に布き人事舊を改め、國家社會の面目殆んど舊容を存するものなし。蓋し各國と交通を開てより、往來訪問絶ゆることなく、彼此の間氣脈相通じ、其互に影響を相及ぼすの敏なる、復た舊時の如くならず。是時に當り歐米の諸國既に已に交通を開き、有無相貿へ、長短相補ひ、富强の策を講じて、互に雄長を爭ふ。是を以て學藝智術日に精奧の域に進み、凡そ世界の上に國し、孤立して獨處するものは、

之れが爲めに左右せられて、勢能く此と相抗するもの莫し。蓋し宇内の大勢を造り且つ變ずるものは、獨り彼等の權に歸するものゝ如し。而して我邦の鎖港に在るや久し、耳目の及ぶ所、足跡の至る所、其區域狹隘にして、學術智術を研磨するの資に乏しく、又之を研磨して其進歩を謀るの要を感知せず、其學術多く歩を彼れに讓り、富強の策亦彼れと抗衡するに足らざるもの固より以ありしなり。一旦開港の擧あるに及んで、是より將に歐米と氣脈相通じ往來訪問日に繁を加へんとす。則ち孤立して獨處するの時に存するの舊容を以て、此新來の大勢に應ぜんか、是れ勢窮し形屈し、未だ善く伸ぶること能はずして、既に之を奈何ともすることなきに終はるものにあらざらんや。是故に國家社會の事其面目を更新するの止むを得ざるに出て、以て宇内の大勢に應じて此と俱に進歩の氣運に乘ぜんと欲するものなり。政令の新にして人事の改まるもの、實に其窮を變じ其屈を伸ぶるものと謂ふべし。眼を轉じて我教界の事を視る、維新の際に在りて早く其舊陋を捨てゝ新見を開くこと能はず、因循苟且以て今に及び、弊害百端尋て紛起す、是れ勢窮し形屈するものにあらずや。其之を奈何ともすることなきに終はるも此時に在り、之を變じ之を伸べて、大に教勢の振張を謀るも亦此時に在り、唯だ嚴護法城の任に當るものゝ用心何如と顧みるのみ。今四外百般の事皆面目を新にして進歩の途に上る、嚴護法城の任に當るもの其間に處して自ら新たにすることなく、教界の事亦獨り其舊態を固守して以て此新勢に應ぜんと欲す、支吾抵觸窮且屈して止むとあるは、鏡に懸けて見るが如きのみ、教界の一新竟に免るべからざるなり。

抑も教界の一新を謀るは、元と嚴護法城の任に當るものゝ責に屬す。嚴護法城の任に當るものに先進あり後進あり、先進の後進を誘導し後進の先進を承翼するありて、乃ち與に俱に其智德を明にし、提携扶持して互に教益を謀り、以て教勢の振張を永遠に維持するを得。先進後進の相待つことあるもの平時に在りても此の如し、況んや教界の事弊害相重なるの時に當り、其舊陋を蕩滌して一新を謀らんとするの秋に於てをや。而して今我教界に觀るに、未だ後進の頭角を顯はすものを見ずして、獨り先進の漸く世を謝するを見る、誘導承翼の事大に憂ふべきものにありて、教勢の弛張亦逆しめ知るべからざるものあらんとす。吾等先進の去るを悲みて後進の繼かざるを歎ずること切なり。今、我教門の老學原坦山禪師の遷化するに遇ひ、吾

等禪師の略傳を敍して之れば追惜の情を陳べんとするに際し、聊か平生の所感を記するもの亦止むを得ざるに出づ。

師諱は覺仙、字は坦山、幼名良作、鶴巢と號す、岩城平の藩士新井勇輔の長子なり。文政二年十月十八日を以て生る、天保四年歳十五昌平黌に入り、丙山清藏に就て經史を學ぶこと八年、天保十一年多紀安叔(樂眞院法印)の塾に入り醫術を學ぶこと五年、弘化元年歳二十六駒込吉祥寺に至り、衆徒の爲に經書を講じ、常に佛敎を排斥す。寺に栴檀林あり、學寮數個を有す。越後寮の寮司を京璨と曰ふ、師に言て曰く子の佛敎を排斥するものは、之を知らざるの過なり、請ふ與に道を論ぜん、輸却するものは則ち弟子とならんと、既にして師の論駁す。師約に依りて弟子たらんと欲す、然れども京璨以て已れの弟子と爲さずして、其師橋場總泉寺主榮禪に就かしむ。師急に僧と爲り、未だ僧の風儀を知らず、因て律儀嚴肅の人を擇び、就て學ばんと欲す。參州西尾の盛巖寺に住人某あり、師往て徒弟と爲り、律儀を修む。幾くもなくして出て、雲水に從ひ、四方に行脚し、名僧知識を訪ふ、嘗て山城に至り、宇治興聖寺の回天に參禮し、機契はず、去て大阪の風外に參禪す。風外の門下に奕堂、藏雲諸公あり、師之と同參。師一日疎山樹塔の公案を風外に敲く、外曰く汝作麼生か會す。師對ふる所あれども、外之を許さず。且曰く疎山の背後に隨逐して何か爲ん、師曰く請ふ和尚垂示したまへ。外曰く老僧今日歐蘇手筯を藉む。師背汗雨の如し、復言ふ所を知らず。是より精勵寢食を忘れ、遂に大に悟る所あり。既にして江戸に歸り榮禪を省す。時に榮禪已に歿す。仍て京璨の室に投じて印可を請ひ、法燈を嗣く。風外老師寂するに及んで、奕堂藏雲二公山城の大悲山に幽居す。師また往て俱に道氣を長養す。二公各化を一方に揚ぐるに及んで、師更に叡山に上り、羅溪の慈本律師に從ひて、天臺の敎相を究む。此時洛東白川の心照寺住職を缺く、師因て其住職と爲る。心照寺なるものは、二條家の祈願處なり、因て又二條公に親近することを得たり。時に蓮月尼なるものあり、名聲甚だ著はる。師之と共に居り瀟洒風流以て月日を送る。又蘭方醫小林宗二なるものあり、師之に京都に遇ひ、互に相論議し、言六識に及ぶ。師六根の六塵に對して、乃ち六識を生ずるを說く。宗二曰く六根なるもの皆局處ありと云ふ、五根は則ち吾爭ふ所なし。獨り意根の在る所は則ち肉團心にして、肉團心なるものは胸中に在りて六瓣を有すと謂ふもの、吾未だ服する能はず。蓋し醫家解剖の術を用ゐ、實に據りて之を驗する

に、肉團心に似たるものは獨り心臟あるのみ。然れども心臟なるものは、血液の出納を司るもの、其法塵に對して因て意識を生ずると謂ふものは、一も憑徵すべきものなし。佛敎の虛誕此の如し、子の言空論のみ信を置くに足らざるなりと。師爭ふこと能はず、是より西洋の學實驗に基き、益する所少なからざるを思ひ、譯書に依て博く西學を究む。他日惑病同源論、腦脊異體論を著はすもの、蓋し亦宗二の言に因て感悟する所あるに由る。師既に二條公に親近す、後ち太に之を罵り罪死若くは流刑に當す。會ま之を救護するものあり、師を以て狂人と爲し、以て處刑を免かれしむ。乃ち京都清水の觀音寺に幽せらる。是より自ら狂禪と稱す。後ち放たれて關東に赴く、將に發せんとし、二條家に至り別を敍し、和歌及び詩を留めて去る。

天つ空心にまかす浮雲の風のいづこにふきさそふらん。

蓋覆乾坤笑女媧、　或登山嶽或泥沙、　隨風隨處無常態、　時起甘霖利國家。

此時本師京聚下總印幡郡中澤村昌福寺の住職と爲り、結制安居を務め、衆生を聚めて之を代益す。師往て之を助け圓覺經を講ず。是を關東化緣の初めと爲す。時に文久二年歲四十八、結城の長德院に住職たり。明治五年敎部省を設くるに及び、各宗の本山に命じ、各碩德十名を撰出せしめ、之れを敎導職に補す。師も亦與る。然れども師故ありて職を辭し、又自ら僧籍を脫し、市に東京に隱くれ、獨り自ら養ふ。西本願寺の大谷光尊之を惜み、師を築地の別院に招聘し、衆徒の爲めに敎授し、且つ貴紳の爲めに佛經祖錄を講ぜしむ。是に於て其名學者貴紳の間に馳す。明治十一年東京大學の文學部に印度哲學の一科を加ふ、師大學綜理の委屬を受け之が講師と爲る。翌年大本山總持寺の住職奕堂禪師遷化す、因て後住を公撰す、相州最乘寺の畔上楳仙師撰に當る。是に於て師聘せられ最乘寺の後住と爲る。此時再び僧籍に入り、少數正に補せらる。明治十八年東京學士會院の會員と爲る。同二十一年大學の講師を辭す。同二十四年管長の命を受け、曹洞宗大學林の總監と爲る。同二十五年內務省の命に依り、曹洞宗事務取扱と爲り、幾くもなくして老衰故を以て之を辭し、同年七月二十七日遂に遷化す、壽七十有四。著はす所、心性實驗論、惑病同源論、腦脊異體論、無明論、心識論、老婆新說、及び鶴巢集等なり。

師の略傳此の如し、其長く敎界の一燈と爲り、初學の士を導き、迷暗の徒を化して、世出世の間に洪益を及ぼしたるもの、以て其一斑を窺ふべし。且つ窃に師の性行を

聞くに、誠に是愛すべきものあり。師の名聲遐邇に著はるゝもの、蓋し偶然にあらざるなり。況んや其學問淵博及ぶべからざるものあるに於てをや。

師性行極めて磊落不羈、權勢を憚ることなし。然れども恭敬謹愼自ら持すること慢ならず、人の名刺を受くるが如き、之を視ること鄭重、其人に對するが如し、曰く名刺は其人を代表するも、以て禮敬を缺くべからずと。其筆を執りて稿を草することあるが如き、亦細楷之を書し、字畫端正一字苟もせず。平居客と縱論し人を嘲罵するに當り、忽ち管長の命を受くることあるが如き、則ち容を改め、禮服を着けて、直ちに之に赴くと云ふ。其膽の大にして心の小なる、以て他を類するに足る。

師既に儒學を修め、且文筆に達す。一旦人と道を論じて言窮し、乃ち剃髮して佛弟子と爲り、心を佛敎に潛めて精通を求む。又四方に行脚し名僧知識を訪ひ、益知見を明にす。其京都に在るや、蘭方醫に遇ひ又議論に屈す。是より空論の益なきを知り、勵精發明する所多し。遂に惑病同源論、腦脊異體論を著はして、敎界の一問題と爲し、名聲益揚る、其過て克く改め屈して愈奮ふもの、後進の宜しく法るべき所なり。「抑も惑病同源論、腦脊異體論なるものは、既に敎界の一問題たり。敎界の士宜しく精究して其實を求むべし。蓋し我佛敎に於て心外無別法にして、心は八識を具ふるを說く。師乃ち心の存する所を尋ねて、其腦裏に在るを信じ經籍に佛頂尊勝陀羅尼及び頭爲殿堂心王在中と曰ふを以て證と爲す。因て曰く人の惑に陷り病に罹るものは、共に脊髓の液逆流して腦髓に入り、腦液と相混淆するに由るものにして、其源は則ち一なりと。醫家或は解剖に依り之を實驗に徵して腦脊の同體なるを說き、以て師の論を排す。師は則ち曰ふ、死人は生人に同じからず、醫家人の死屍に驗して、以て生人を語る、焉んぞ虛妄を免れんや。予の言ふ所は生人を以て生人に驗するもの、深く思ひ熟々考ふるときは、必ず吾說の誤らざるを知らんと。師曾て東京學士會院に於て此說を陳ぶ、曰く予今獨り口舌を以て之を論ずるも、或は人の之を解する能はざらんことを恐る。予は予の死するに及び、身を以て之を證せんのみと。師深く惑病の同源なるを信ず、因て以爲らく惑除くことを得べくば、病も亦生ずることなしと、今師が臨終に至るの狀を見るに、心氣從容話談平生に異ならず、醫之を診すれども竟に病症を見ることなし、惟だ老衰虛弱に陷るのみ、以て命を終ふるに至る、平生の言果して驗ありと謂ふべし。師又曾て佛仙を論じて曰く佛は覺を成すの謂なり、仙は病な

くして死するの謂なり、佛仙皆庶幾すべしと。皆確として自ら得る所あるの言にあらざらんや。明治二十三年教源なるもの五首を咏ず、蓋し惑病同源、腦脊異體の論を約するものにして、法を說き敎を講ずるもの主として此に據ると云ふ。乃ち曰く人の予を罪するもの其れ此に在るか、其予を知るもの亦其れ此に在るかと。吾等未だ悉く師此論を知ること能はずと雖も、其敎界の一問題と爲りて綽として餘あるに足るは、復疑を容るゝ所にあらざるなり。而して今師已に逝く、復就て正すこと能はず、甚だ憾むべしと爲す。然れども著あり之を前に論じ、身あり之を後に證し、考究の緒繹ぬべきものあり。考究の事吾等尤も之を我敎界の士に望まざるを得ず。

按ずるに師篤學精勤、膽大にして心小に、過て克く改め屈して愈奮ひ、自ら工夫し自ら發明し、豁然洞通する處あり、爛たる光明長く敎界に輝きて以て人の師表と爲り、四海の內に其名を知られて人の敬愛を受くる良に以あるなり。一朝無常の風に當り、光明忽ち他界に奪はれ、呼べども應ぜず挽けども回らず。學者貴紳之を惜み、後進子弟怙恃を失ふが如し。吾等敎界多事なるの日に當り、未だ後進有爲の士を見ること能はずして、先進の相尋て逝くを歎ず。況んや師の如く、學德俱に高く敎界希覯の士にして、乃ち亦盡焉として世を謝するに至る。嗚命限あり、人力之を奈何ともすることなしと雖も能く闇然たるものなからんや。哀哉。

## (二) 追悼原坦山老禪師疏

身心滅盡了、覺性滿虛空、眞月非來去、影光西又東、仰惟眞慈、俯垂照鑑、維時明治廿五年九月十有三日大日本曹洞宗大學林衆生等、恭迎故本林總監坦山覺仙大和尙之眞於大講堂、虔具香華蔬茗之微供、特請永平貫首大禪師、恭修出班燒香之令典、且諷誦經咒、所集殊勳、上酬慈恩者也、伏惟、苦習困學、逍遙推儒敲、醫、實修妙證縱橫呵佛罵祖、會蒙京璨喝破、脫出晦庵一生之理窟、復被風外笑倒、失却疎山三文之閑錢、腦脊異體之創見、內外驚人、惑病同源之發揮、古今讓誰、初講白法於帝國大學、且振緇衣於學士會院、平生數卷之遺著、頗文彩筆力可見、臨終一片之郵書大風流、襟懷坦想、伏冀後進徒輩、聚爾鹹獻、大寂定中、嘿然容納、　謹疏

維時明治廿五年九月十有三日　曹洞宗大學林衆徒等謹疏

## (三) 追悼坦山老和尚文

佐々木狂介

維、明治廿五年八月初八、辱知生狂介、長跪合掌、敬點抹香一炷、以奠酒豆腐之奠、敬供亡師友坦山老和尚牌前而陳辯曰、噫、和尚逝矣。我東洋佛教喪一奇傑矣。至如不肖介、亦亡難得之一師友矣。死者不復生、其能不痛悼乎。余之始識和尚也、實在明治六年、時余以淺學、叨出仕于大教院、因不圖與和尚同僚、余之粗慢猖狂、衆之所嘗指、而和尚獨容之、愛而教之、遂爲忘年交。明年大教院學舍廢、余更奉宗主命、與大內青巒、創教校于築地別院內、於是相謀請宗主、聘和尚爲教頭、教務之暇、夙夜就受益、其年夏、余以疾辭職歸鄉、而一與和尚別矣。八年春、余於宗內蒙異計嫌、再出遊東都、其秋介青巒氏、謁于得庵先生、因挾文筆游于其居士林、時和尚展轉備仕眞宗局、教授子弟、遂相與同寓於猿樂坊、和尚常嗜酒與豆腐、日夕對膳。醉則吟唐詩歌俗曲、傍若無人、醒則評文史談佛法、此時余僅聞我宗云爲、而未達實義、與和尚討論、每墮負處、和尚輒加以慢罵嘲笑、殆使人難堪、然猶忍不敢去、知其出於愛、余之餘也、和尚已與得庵居士神契、屢相往來、互鬪禪機、余常在側、得熟觀兩雄舉止之神速、與其殺活之自由、因知我佛有不可思議解脫法門、決非荒誕也。而我辯教本願圓頓一乘、則又別有妙味存焉、所以古今兩宗雙立而不相妨也。然余非從游于居士與和尚之間、惡能得嘗言外妙味、如此之深乎。偶其冬西南役興、明年一月、居士出陣於浪華、而余亦歸鄉、因與和尚再別矣。其夏、余又出東京、在築地教校、一日偕妻訪和尚於下谷、貽以單衫、和尚偶以罹災後、欣而受焉。其秋、余遊于北越、留四年、歸鄉之日、又教授于縣校、無因緣相會。廿年春遊東都、又一訪和尚于下谷、而不逢、自是終成永訣矣。憶悲夫、蓋死生有命、如夜旦之有常、何獨於和尚怪之、又矧達人大觀、死者未曾死、生者未曾生乎、故曰、旋嵐偃岳而常靜、江河競注而不流、由是觀之、和尚固不死、狂介固不生、余又何弔也、雖然、余與和尚同出于人間、則又有其情焉、既喜逢而悲別、豈又得無視生而悼死之義、悠々人世、得知已其難、而和尚獨容余教、余痛德音之難再聆、悲道友之不易值、所以接訃憂愁洸吟累日也。偶我先達大洲然公、以其有夙契、首爲和尚設法筵、自赤松水原諸老、凡與和尚有面識者皆與焉。介因追想往昔、聊供海奠、唯恨此酒與此豆腐、不得使和尚一醉發長歌、而余心亦索然覺無興味而已、不知老和尚果呵々大笑于地下否、嗚呼哀哉、尚饗。





## (四) 追悼

蝸廬鶴巢絕羈絆。學白談禪也太奇。八識二心存異義。五論一說壓當時。
如僧如俗舌無骨。是佛是仙額有眉。七十四年翻筋斗。虛空蹶踢竟何之。

## (五) 恭悼原坦山老宗師遷化

松蔭 今川龍珍

洞水波瀾尚未平。坦山崩潰亦頹傾。僧家十萬顏無色。學士三千哭有聲。
富嶽雲遮穩顯妙。江湖月朗去來明。溫容和氣天眞佛。正好生涯活眼睛。

## (六) 聞坦山師訃悵然書

嵩古香

寥落復寥落、喫驚仍吃驚、一鶴冲空去、青山空月明、

## (七) 同

同

## (八) 讀原坦山翁傳記感

高津柏樹

七十餘年濟渡津、綠楊風美白鷗馴。天堂吾欲就師問、出世世間誰替人、
化後看傳獲我心、醫家生者死屍尋、古來書卷存眞理、萬斛砂中有數金、

## ○ 覺仙坦山老師碑

自泰西實驗之學一入我、凡百之事、概取則於此、獨釋氏之徒、依然唯尙理觀、無一及之者、而有之始于吾鶴巢老師矣。師年甫十五、入昌平校、兼修醫術、弱冠過榮禪和尙、始知佛法爲大丈夫之學、剃染爲僧、徧參諸方、旣而得證於風外老人、嗣法於京瑞禪師、機鋒險峻、名聲振叢林、一日遊京都、遊近小森某某修西學者、說其實驗甚詳、師傾聽者久之、忽曰我佛法他日恐爲此學所排斥。曾入八事山中、承仙訣於正光眞人、謂此可以資也、自是專心研思、大有所發明、乃著書爲辨迷修證之要旨、其說甚異古今理談、因創佛仙社、聚徒授之、自言知我罪我者其唯在此。安政乙卯、瑞世永平寺、明年、建法幢於洛北心性寺、無幾退休、再托迹水雲十餘年。明治五年官置教導職、師累遷至少教正。十二年、帝國大學始置印度哲學科、擢師爲講師、大學講釋典、實始于此。十八年選爲學士會院會員、緇流入此院、亦爲嚆矢。二十五年、曹洞宗管長缺其人、內務大臣特命攝理宗務。七月、師困臥累日、似有疾者、衆醫診候、皆言不見病徵、二十七日、俄呼筆硯、身自裁束、報故舊門生、曰老衲即刻臨終敢報。

侍者諦遺囑、師笑曰、死後之事復何爲、泰然盥白髭而寂矣。火浴分葬市谷長昌寺、及相模最乘寺、下總長德院。師諱良作、字坦山號覺仙、又鶴巢、磐城平藩士、新井君勇輔長男、以文政二年十月十八日生、享年七十四。老師爲人、軀幹肥胖、容貌偉秀、言行如落々、而又似甚翼々者、時或呵佛罵仙、醉倒諸謔、頗如狂、或思親誨徒、可哀懇款、至感欷流涕、其擧止殆不可端倪、嘗任曹洞大學林總監、又執經異宗教校、薫陶所及、使人志氣勃興。所著、無明論、心識論、惑病同原論、腦脊異體論、心性實驗錄、老婆新說等、悉無非佛法實驗之說。頃者、弟子等謀建碑、囑余撰文、乃錄其梗概、以告來者。今夫西學日益進矣。噫能繼老師而完斯道者其誰也。

明治二十七年八月

門下生　大內青巒敬撰

明治四十二年十一月十日印刷
明治四十二年十一月十三日發行

坦山和尚全集奥付

定價壹圓三十錢

著作者　釋悟庵
發行者　平本正次　東京市神田區駿河臺袋町一番地
印刷者　天野耕一　東京市牛込區市ヶ谷加賀町壹丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場　東京市牛込區市ヶ谷加賀町壹丁目十二番地

發行所　光融館　（東京市神田區駿河臺袋町一番地）
（電話本局二九九九番）
（振替口座東京二三一三番）

不許複製

# 光融館出版書籍大賣捌所

| | |
|---|---|
| 東京神田 | 東京堂 |
| 同 | 上田屋 |
| 同 | 岡崎屋 |
| 同 | 三省堂 |
| 同 | 中庸堂 |
| 同 | 二松堂 |
| 同 | 有斐閣 |
| 同 | 洪智堂 |
| 同 | 修學堂 |
| 同 | 武蔵屋 |
| 同 | 大野書店 |
| 同 | 改盟堂 |
| 同本郷 | 東亞堂 |
| 同 | 森江分店 |
| 同 | 岡崎屋 |
| 同 | 盛春堂 |
| 同 | 日本堂 |
| 同日本橋 | 大倉書店 |
| 同 | 林平 |
| 同 | 文林堂 |
| 同 | 前川文榮閣 |
| 同京橋 | 東海堂 |
| 同 | 北陸館 |
| 同 | 貝明堂 |
| 同 | 松邑三松堂 |
| 同 | 春祥堂 |
| 同 | 目黒書店 |
| 同芝 | 鴻盟社 |
| 同 | 佛教館 |
| 同 | 福島屋 |
| 同麻布 | 森江書店 |

| | |
|---|---|
| 東京淺草 | 淺倉屋 |
| 同 | 伊藤清九郎 |
| 同 | 一喝社 |
| 同牛込 | 盛文堂 |
| 同 | 積文堂 |
| 同小石川 | 原文堂 |
| 同 | 鶴聲堂 |
| 同麹町 | 明々堂 |
| 同 | 文光堂 |
| 同四ッ谷 | 櫻井書店 |

●●●地方大賣捌店●●●

| | |
|---|---|
| 横濱 | 有隣堂 |
| 同 | 弘集堂 |
| 同 | 勉強堂 |
| 同 | 弘文堂 |
| 靜岡 | 吉見書店 |
| 濱松 | 谷島屋書店 |
| 名古屋 | 川瀬代助 |
| 同 | 永東書店 |
| 同 | 文光堂 |
| 同 | 其中堂 |
| 岐阜 | 郁文堂 |
| 京都二條 | 貝葉書院 |
| 同三條 | 出雲寺書店 |
| 同油小路 | 興教書院 |
| 同 | 顯道書院 |
| 同五條 | 爲法館 |
| 同六條 | 法藏館 |
| 同 | 法文館 |
| 同寺町 | 若林書店 |

| | |
|---|---|
| 大阪備後町 | 吉岡平助 |
| 同安土町 | 吉田書店 |
| 同南渡邊町 | 杉本書店 |
| 同 | 積文社 |
| 龍野 | 伏見屋 |
| 廣島 | 積善館 |
| 同 | 洗心書房 |
| 姫路 | 水村書店 |
| 岡山 | 武内書店 |
| 博多 | 積善館支店 |
| 久留米 | 菊竹書店 |
| 大分 | 甲斐治平 |
| 熊本 | 長崎次郎 |
| 高井 | 品川太右衛門 |
| 同 | 平澤潤助 |
| 同 | 日新館 |
| 同 | 中村六三郎 |
| 金澤 | 宇都宮源平 |
| 高岡 | 學海堂 |
| 富山 | 中田書店 |
| 長岡 | 目黒十郎 |
| 水原 | 四村六平 |
| 新潟 | 北光社 |
| 同 | 萬松堂 |
| 長野 | 西澤容太郎 |
| 同 | 朝陽館 |
| 松本 | 高美書店 |
| 仙臺 | 藤崎書店 |
| 弘前 | 今泉道次郎 |
| 秋田 | 石川書店 |
| 札幌 | 宮貸堂 |


# 佛教書肆光融館藏版目錄

## ○華天台台の部

文學博士 上田萬年君序○文學博士 芳賀矢一君序
織田得能師著

### ●法華經講義（四版）

和裝帙入 全八卷 定價三圓五十錢 郵稅十六錢

妙法蓮華經は釋迦一代四十餘年の說法を歸納總括せる所の所謂攝末歸本法輪の聖典にして、實に佛敎の眼目たり骨髓たる經典なり。大乘の各派之に據りて開け、東洋諸國の思想之が爲に陶冶せられたること數千百年に及び、諸法實相の眞理を說くに巧妙絕倫なる譬喩を以てす。又之を文學の方面より觀るも、其想其文共に最大偉觀を呈し、我國文學の如き半は「法華經」の反映たるを見る。本館茲に織田得能師に請ひ、平易簡明、門外好適の講義八卷を刊行す。速に一本を供へて此偉大なる敎師に接せよ。

織田得能師講述

### ●天台四敎儀講義（新刊）

和裝一冊 定價五十錢 送料六錢

天台の學は即ち佛敎の學にして、天台大師先づ「法華經」に對する解釋を下し「玄義」「文句」「止觀」の三大部を著し、茲に藏通別圓四敎の宗義を組織せられたり。然るに宗義廣大にして、此に存する所を知るに苦む。こゝに高麗の沙門諦觀師あつて、此要求に應じ、四敎の要義を錄し、「天台四敎儀」と云ふ。天台の學を研究せんとする者は、先づ第一に本書を選ばざるべからず。

島地大等師講述

### ●十不二門論講義（新刊）

和裝一冊 定價六十五錢 送料八錢

本書は著者大に其講義の面目を改め、第一篇に支那天台の歷史を敍して本朝天台敎史の大要、本論研究の歷史に及び第二篇に於て天台敎の要領を述べ、要義は一切舉げて此中に收む。第三篇に至りて、各章本文、分科解釋の三段を分つ。然れば本講義一部を求むれば自ら天台敎史、及天台敎義の要領を知るの便あり。苟も天台に志す者は必ず一本を備へざるべからず。

文學博士 前田慧雲師講述

### ●天台西谷名目講義（五版）

和裝一冊 定價四十錢 送料六錢

天台西谷名目とは、比叡山東塔の西谷より出せる、天台宗圓敎に用ふる所の術語と云ふことなり。然れば本書を讀む者は、天台宗の術語を知ると共に、又天台圓敎の敎理をも識ることを得。而して天台の敎理はやがて佛敎の半面なれば、佛敎の大意を知らんと欲する局外者には、好適の書と云ふべし。本文は問答體を以て記され、それを更に講義したるものなり。

姫宮大圓師講述　釋清潭師講述

### ●菩提心論講義 ●大乘止觀頌講義（合本二版）

全一冊 定價十六錢 送料四錢

菩提心論は八宗の祖師龍樹菩薩の著作にして、眞言密敎の菩提心を論じたる者なり。眞言宗即身成佛の義は源此書より出でたり。○大乘止觀頌は支那天台宗第三祖南岳慧思大師の著作に係り、天台の觀心止觀の要義を、偈頌を以て述べられたるものなり。○開

書ともに、各其學に專門攻究せられたる 姫宮大圓師釋清潭師なれば、其親切なる實に稀有の講本たり。

大內青巒居士講述

**●原人論講義(十版)** 和裝一冊 定價三十五錢 送料六錢

本論は支那唐の宗密禪師の著作にして、人は何れより來り何れに去るかの大問題を明にし、破邪顯正の論法に依りて、先づ儒道二教を破し、小乘教を斥け、權大乘を駁し、實大乘華嚴の宗義を顯し、後に論理を加へたるものなれば、門外初心の士、佛教哲學を親ふに就て最上の良書なりと信ず、其講義は大內青巒居士輕妙の筆に成りたれば、一讀して能く了解するを得べし。

釋雲照律師著

**●訓譯原人論 一冊** 定價五錢 送料二錢

原人論は支那唐の終南山圭峰宗密禪師の著にして、人間の獨生獨死獨去獨來するの哲理を破邪顯正の論法によりて明したるものなり。紙數僅少にして而も高尚の哲理を既けば、旬日の講習等に於ける講本として頗る妙なり。本館は殊に此目的を以て原本を訓譯し、一般人士の爲に便益を圖りたり。

**●校訂 大乘起信論義記(四版縮刷)** 和裝一冊 定價三十錢 送料六錢

佛滅後小乘獨り勢を得て、大乘更に振はず、是に於て馬鳴菩薩起り、大乘を興して小乘を斥け、「大乘起信論」を著す。阿彌陀佛四方淨土の思想、蓋し此書中に初まる。然れば大乘研究者は必ず此書を繙き、註疏を造る者亦甚だ多し。支那唐代に於て華嚴宗の疏鈔を著し、「大乘起信論義記」と云ふ。爾來起信論研究者の必須缺くべからざる寶典となるに至れり。

織田得能師講述

**●大乘起信論義記講義(三版)** クロース金文字 一冊 定價一圓五十錢 送料十二錢

此「大乘起信論」は、印度の馬鳴論士の著作として有名なり。而してまた其「義記」は華嚴宗祖、支那唐の賢首大師の註釋として有名なり。今や各宗々教學校に於て教科書として採用すと雖も「義記」の文亦難解なり。依つて織田得能師、更に「義記」の未疏を涉獵して平易に之れを六百餘頁に講述し、以て大乘起信論研究者の坐右に進めらる、講義の親切叮嚀なる敢て言を要せず。

亀谷天尊師講述

**●金獅子章講義(刊新)** 和裝一冊 定價二十五錢 送料四錢

華嚴宗の開祖賢首大師、即天皇后の召に應じ長生殿に於て華嚴聖典の法門を講說し、縱橫無盡に事々無礙法界の法界緣起を說破するに當り殿中に在りし金獅子の飾物を取つて喩とし、法界緣起の妙理を發揮す、其の說を著し題して「金獅子章」と云ふ。初學を指して法界緣起の深理を容易に理解せしめむと欲せば、恐く此書を措て他に求むべからず。

藤谷還由師講述

**●華嚴學講義(二版)** 全一冊 定價二十五錢 送料四錢

大方廣佛華嚴經は八十卷ありて釋尊最初の說法根本法論なり。本書は即ち此經の要義を探り、華嚴の宗義を闡顯し、華嚴大乘事事無礙法界の深義を說きたるものなり。著者は即ち眞宗大谷派の碩學にして、殊に華嚴學を專攻せられたり。

## ○禪宗の部

大內青巒居士講述

**●圓覺經講義(刊新)** 和裝一冊 定價六十五錢 送料八錢

圓覺經は具に大方廣圓覺修多羅了義經と稱し、彼の楞嚴經と共に禪師宗に於ては必ず研究せざるべからざる經典となせり。其內容は圓覺を廣說したるものにして、其理窟の堅きこと巖石に勝れたり。故に古來此經の註釋甚だ多く、彼の宗密禪師の如きは、一人にして五部四十二卷の註釋を著はせり。然れども何れも其の註釋に亦難義を要する程なり。依つて大內青巒居士經健なる既に易通俗を旨として、本經を講ぜらるゝ頗る親切なり、讀む者必ず之を解し、解する者必ず其益あるべし。

原坦山老師遺稿大內青巒居士校訂

**●首楞嚴經講義 一卷** 定價四十錢 送料四錢 **二卷** 同 三十錢 同 四錢

首楞嚴經は大小乘通じて崇重せる經典なり。殊に禪宗に於ては、因覺經と共に是非とも研究せざる可からざる經典なりとす。此經典は文辭極めて巧妙にして文學上の價値又饒多なり。明治の豪傑原坦山老禪師は、此經を講ずること最も得意にして、殊に老師は遠く見を以て本經を講ぜられたれば、文々句々の上に躍如たる老師の面影の現出するを見る可し。今老師の高弟大內青巒士に請ひ懇切なる校訂を加へて世に公にす。敢て楞嚴辨道に志ずる者に勸む、一本を淨机の上に備へんを。

釋宗演禪師講述

**●金剛經講義(四版)** 和裝一冊 定價二十錢 送料四錢

金剛經は佛祖の心法、即ち人類の性源を既き顯したる經典なり。從來二三の註疏あり、と雖、專門學徒のために、したるものにして、來人をして之れを了解せしむるに足らず。本書は宗演禪師特に斯道學徒のために、懇切に筆を下したるものにして、其考證の解く、且つ正確なるは、專門の細徒並に一般學者の爲に、最良の指南車として勸むるに恥ぢざる讀物なり。

文學博士 南條文雄師講述

**●梵文金剛經講義(刊新)** 和裝一冊 定價九、十錢 送料八錢

本書は「金剛經」の梵文を羅馬字にて寫して其正音を顯し、之れを訓譯して漢譯諸本と比較し講述したるものなれば、梵學研究者に取りては、他に得べからざる良好の講義なり。

大內青巒居士講述

**●般若心經講義(十版)** 和裝一冊 定價二十錢 送料四錢

**●佛說法滅盡經講義** 和紙英國刊和綴 大本 六冊 定價五四 送料大錢

○「般若心經」は「大般若經」六百卷の精髓を總括せし經典にして、一切皆空を說けり、故に空宗に取りては重要の經典なり。語簡にして意深しと雖も、大內居士得意の辯を以て平易に講述せられたり。○「法滅盡經」は佛教が末代に至りて滅盡せむとする有樣を、佛自ら豫言したまふ經典なり。一たびこれを讀まば、慚汗脇に滴るを覺ゆべし。現時特に必讀すべき寶典なりと信ず。

東嶺禪師著

**●達磨禪經說通考疏(再版)** 和紙英國刊和綴 大本 六冊 定價五四 送料大錢

白隱禪師下に其人ありと知られたる東嶺大禪師は、學識卓絕、道德拔群を以て錚々の名あり。本書は即ち禪門に於て異說紛々たる達磨禪經の考證註解なり。禪師該博なる學識と卓越せる見解とを以て、區々の說を排斥し是非黑白を決すること實に痛快なるものあり。其考證の正確なること註解の親切なることは、敢て贊言を要せざるなり。故に斯道研究の士に取つて本書は既に六韜三略とも稱すべき美遺大判紙五百餘枚の聖典なり、醍醐法愛理の人士よ、請ふ一本を右に備へて佛心の奧妙を抑けよ。

大內青巒居士講述

**●碧巖錄講義(五版)** 和裝帙入 定價三四 全三冊 送料十六錢

碧巖は宗門第一の書なり、佛教の堂奧を窺ふには必ず此書に依るべき然ども其玄旨の解し難きは、古今學者の同嘆也。道元禪師以後の碩學にして、又臨濟の佛法を叩きたる天桂禪師門人のために此書を提唱する親切なり。然るに其書寫本に傳本最も少し今其正を得て他本と校合し、樹外更に專門語、並に俚諺國語等一々解釋したれば嬉女と雖も了解するを得べし。殊に黃檗曹洞臨濟三派の碩學より校閱を受けたれば、盡く完備にして豈の遺憾なし、苟も斯道に益せんとする士は、速に此書に就き、佛祖と共に親しく問

天桂禪師提唱 松崎愛本師參訂編輯

**●碧巖錄講義(五版)** 和裝帙入 定價三四 全三冊 送料十六錢

碧巖は宗門第一の書なり、佛教の堂奧を窺ふには必ず此書に依るべき然ども其玄旨の解し難きは、古今學者の同嘆也。道元禪師以後の碩學にして、又臨濟の佛法を叩きたる天桂禪師門人のために此書を提唱する親切なり。然るに其書寫本に傳本最も少し今其正を得て他本と校合し、樹外更に專門語、並に俚諺國語等一々解釋したれば嬉女と雖も了解するを得べし。殊に黃檗曹洞臨濟三派の碩學より校閱を受けたれば、盡く完備にして豈の遺憾なし、苟も斯道に益せんとする士は、速に此書に就き、佛祖と共に親しく問

益せられんことを。

勝峯大徹老禪師講述

## 臨濟錄講義（新刊）　和裝一册　定價八十錢　送料八錢

禪宗臨濟の開祖惠照禪師一代の法語を集錄せしもの、此れを臨濟錄と云ふ、敢て臨濟宗に限らず、曹洞黄檗は勿論、苟も禪門に趣味を有する士は、須らくこの高祖に接して、活きたる禪法を闡明せずば、未だ以て禪を談ずるの資格なきものとす。而も大徹師八十有餘の老軀を顧みず、高座の上に大音獅子吼し、活潑々池の提唱を試み、遺憾なく本書の眞假を顯彰せらる。有目の者茲に一步を踏出せば、恰も窓を隔てゝ馬騎を看るが如し、眼を貶得するに、早や已に蹉過せむ。道を求むるは今日今時なり、其起きたる善念を棄つる勿れ。

高田道見師講述

## 從容錄講話　和裝帙入二册　定價四圓　送料二十錢

從容錄は碧巖錄と共に古來難解の書として併稱せらる、其內容は禪學奧義の講話訣片等を蒐錄せるものにして禪學家の一日も缺くべからざる貴重の寶典なり、茲に禪門の大家高田道見師よく之の深奧なる禪理を最も平易に最も明快なる筆もて、說破せられたるものにして、其旨々句々文字外に迸り、愉絕快絕を極む、實にこれ自修獨習の好指南車たり。

山田孝道師孝述

## 潙山警策講義（新刊）　和裝一册　定價三十錢　送料四錢

本書は支那禪宗潙仰派の開祖潙山禪師が、熱血を以て貪眠瀕の頭上に加へられたる、大慈大悲の大鐵鎚なり。日夜十二時莫器を抱へ、本來具有の面目を識らず、徒らに俗界利欲の巷にのみ走る底の尻に、滿身の力を入れて、匝れよと笞うたる、警戒の鞭なり。然れば現時混濁の教界、奢侈、懦弱の社會を救濟すべき、最上無上の好著たり。時を憂ふ天下の志士、一讀し給はんことを。

若生形山師講述

## 禪關策進講義（新刊）　和裝一册　定價六十五錢　送料八錢

禪何ぞ關門あらんやとは、本書の序文に示す所なれども、差別の見を有する者に對しては、自ら茲に關門ありて、透入すること易からざるなり。依つて禪道三昧を修證せむと欲する者に向つて、諸祖法語、諸祖苦功、諸經引證の三部門に分ち、百有餘則を提起して、大に策勵を加ふるを禪關策進とす。而も國榮師の講述する所親切懇剴を施し、以て萬人に讀み易からしめたり。

釋宗演禪師講述

## 無門關講義（再版）　和裝一册　定價七十五錢　送料八錢

本書は支那宋の理宗皇帝即位の佳節を奉祝して、無門慧開禪師が、發に四十八則を提起し、無門の禪城に關門あることを指示されし聖典なり。○趙州狗子○百丈野狐○世尊拈華○南泉斬猫○國師三喚○不思善惡○非風非幡○庭前柏樹○趯倒淨瓶○乾峰一路等の公案は其の主なるものにして、是れ即ち禪城の關門なり。于に大慈大悲の熱喝を以て此關門を開くべき鍵鑰を與ふる者あり。之れ誰ぞや。曰く鎌倉の老師宗演禪師なりとす。其講話たるや旨々句々熱血溢れ、或は論じ、或は激す、禪師の面影自ら紙上に現る。

大内青巒居士講述　釋宗演禪師講述

## 碧巖錄十則講義　寶鏡三昧講義（三版）　二百八十頁　一册　定價四十錢　送料八錢

碧巖錄は禪學を參究せんとする者の必ず繙かざるべからざる寶典なれども、文辭至難解すべからず、旨々句々深邃高尚なる哲理を含蓄し、容易に窺ふべからず。依つて茲に斯道に造詣深き青巒居士之れを慨嘆して十則迄を講述し、初心の者に與へらるゝ老婆親切なり、○寶鏡三昧は四百十六句三百七十六字より成る悟道の頌歌なり。鎌倉の圓覺寺前管長釋宗演師、縱橫無礙の快辯を以て提唱せらる、之を讀む者識らず快哉を叫ぶと○其他「十玄談」「仰[illegible]要路」



等有益なる禪書詳解を附載す。

若生國榮師講述

## 寒山詩講義（六版）　和裝一册　定價五十錢　送料八錢

寒山子は拾得子と並稱せらるゝ貧士風狂の士なり。其容貌を見れば蓬頭垢面斷衫破衣、人の嫌厭するを意とせず、呵々大笑して去る。旨々句をなし、句々自ら詩をなす。茲に集むる所三百十一首皆な之れ難解なり。若生國榮師即ち白隱和尚の「闡提記聞」に據りて、古事典故は一々明確に之を陳べ、輕快流暢なる筆を以て、詩中に横はる禪學の幽意を闡說せらるゝ痛快也。

山田孝道師講述

## 菜根譚講義（五版）　訂正五版　和裝帙入二册　定價一圓　送料十二錢

菜根譚は明の高士洪自誠が儒道釋三教の綱を發き世態人情の微を穿ち、警醒悟道の要訣を示す。前集は立身處世の道を論じ、後集は退靜閑居の樂を說く。本篇は原文に句讀訓點を施し、更に之を和譯して假名を附し、平易通俗の辭を以て親切に其文義を詳解して餘蘊なし、何人も一讀すれば手舞ひ足踏むの快を得終身其道を用ひて餘りあり、是れ求道者必讀の書也。

山田孝道師講述

## 普勸坐禪儀講義　坐禪用心記講義（五版）　全一册　定價二十錢　送料四錢

「普勸坐禪儀」は承陽大師道元禪師の著にして「坐禪用心記」は弘德圓明國師瑩山禪師の著なり、兩書ともに坐禪の仕方儀式作法及坐禪を實修する心得等を精細に垂示せる所の聖教なり。今山田孝道師は最も平易、且つ通俗的に講述せられしものなれば、如何なる初學俗人と雖も、一たび之を繙けば、坐禪の作法要旨を了解して、大悟徹底の妙境界に達するを得べし。

山田孝道師講述

## 學道用心集講義（再版）　和裝一册　定價三十五錢　送料四錢

本書は道元禪師御道文中の精髓にして、苟も籍を洞門に掛くる者一日も缺くべからざる寶典なり。山田孝道師多年參究なされ、偏を破し邪を排し、一目洞然宗祖の眞意何人にも解了し得らるゝ樣平易なる口語を以て講述せられしものなれば、洞門の僧俗は勿論他門の人と雖も、洞上の深旨を探らんと欲するの士は、請ふ幸に一本を購ふて座右に供せよ。

山田孝道師講述

## 證道歌講義（三版）　全一册　定價十六錢　送料四錢

此證道歌は唐の永嘉大師が、悟道に入りしを歌ひし讚歌にして語簡に意深く、押韻自在、聲調流暢實に、禪門千古の絕唱なれば、五家七宗の齊しく誦し來る所なり。從來二三の解釋あるも、註家に了解し難きを憂ひ、山田孝道師通俗達意的に講述せられたれば既に老幼婦女も解了し得べし。實に禪理の妙を會し大悟の域に達する捷徑本書の右に出づる者なかる可し。

山田孝道師講述

## 信心銘講義（三版）　定價十六錢　送料二錢

信心銘は達磨大師より三代目に當る僧璨大師の撰述にして、四一百四十六句五百七十四字より成立せる一種長篇の韻語なり。當時達磨大師より多くの年代を經ざるに教外直傳の大道を誤解する者多く、佛祖正傳の王三昧も、二乘の習禪と混淆せらるゝに至るを憂へ、嫡傳の宗綱をかゝげて辨道修行の標準とせるもの本書なりとす。講說平易、讀み易く曉り易し。

高田道見師講述

## 正法眼藏辨道話講義（新刊）　和裝一册　定價五十錢　送料八錢

「正法眼藏」中の一篇「辨道話」は坐禪辨道の法話と云ふことなり。而してその道とは無上正覺の大道にして、宇宙法界に遍滿する所のものなり。此の道を獲得するは念佛にもあらず、題目にもあらず、唯坐禪の一法あるのみ。若し夫れ坐禪に依りて此の道を獲得せば、即身即佛、是身是佛なりと開示するは本書の大要とす。其の講義の親切叮嚀なる敢て言を要せず。

白隱禪師著

**寢惚の眼覺**(五版) 全一冊 定價六錢 送料二錢

勅諡正宗國師白隱和尚が江戸へ鬼鍋の時、衆生煩惱の夢を覺さんがため、例の滑稽洒落の假名文を以て、面白をかしく達磨宗單傳の妙旨を發揮せられたるものにて、一たび之を繙けば卷の終るを惜み、再讀三讀之を收むると能はざる妙あらむ。

森大狂居士參訂

**禪林叢書第壹編** 和裝一冊 定價三十五錢 送料六錢

**▲東坡禪喜集 澤庵和尚垂示 正眼國師眼目▼**

本編收むる所の東坡禪喜集は、宋代の大文豪たる東坡が禪學に關する詩文逸話等を集めたるものなり。○澤庵和尚の垂示は、是れ大德の慈誨仰信すべし。正眼國師の眼目は、是れ又珍本にして、古寫本を得て上梓したるものなり。世間の大宗匠たる正眼國師の肝膽心腸を徹見して大悟徹底の妙境に徜徉せんとするの士は、須らく之を讀め。

森大狂居士參訂

**禪林叢書第貳編** 和裝一冊 定價三十五錢 送料六錢

**▲道元禪師和歌集 法燈國師法語 居士分燈錄▼**

道元禪師の和歌によりて、禪法の如何に歌ひ出されしかを觀る可し。○由良の開山法燈國師の法語は、簡切明快なり、初心の者先づ之を繙く可し。○居士分燈錄には珍本にして坊間に求むべからず、上は雜學より張無盡、李翺、東坡、谷山、富弼を初め七十餘人の大儒居士が參禪したる事蹟を詳錄したるものなれば、世の居士等必讀の耳書なり。

森大狂居士參訂

**一休和尚全集**(五版) 和裝一冊 定價五十錢 送料八錢

紫野大德寺の一休和尚は千古越絕の風流洒落兒なり。一代遊戲七十餘年遺著又少かからず、然れども世に流布する所概れ信を置き難し。本編風に之を遺憾とし、諸方に探りて和尚の墨蹟○小說○物語○論曲○講話○偈頌○和歌等一代の珍書を集め叢訂を加へ解題を施し流禪中にあり請ふ來り參ぜよ。

禪學編輯局參訂

**白隱和尚全集**(六版) 和裝一冊 定價五十錢 送料八錢

白隱和尚一代八十餘年間橫說竪說兒孫の爲に垂示するもの甚だ多し、向上のもの佛祖も奴ひ難く、老婆なるは嬰人小兒も解すべく、渴して水を飲む如く飢て食ふの惑あらむ本館和尚一代の言を集めて、江湖參玄の士に頒たんと欲し、諸大德の助力を得んと欲せば諸ふ此を以て南針とせよ。

釋悟庵師編

**坦山和尚全集**(新刊) 和裝洋裝美本一冊 送料十二錢

明治の末葉、敎界の偉僧たる原坦山和尚は、洒々落々の禪師たりと雖も、其自ら信ずる所を實行せし偉傑なりき故に非俗非僧と唱けられ、佛敎破壞者と罵らるる然れども世の非難を顧みず、飽くまで其所信を貫けり。本書收むる所實に惑溺同原○臨宗異體○心性實驗錄○演說○講話○詩文○逸話等にして、一讀の下迥箇の活禪僧に接するを得んか。殊に其逸話に至っては諧謔滑稽實に面白き理に禪旨を啓く。逸磨眞禪の妙奧を獲んと欲するの士は、請ふ速に來つて本書を繙け。

山田孝道師校註

**禪門法語集**(六版) 總クロース仕立 洋裝美本 一冊 定價一圓半 送料十二錢

校補點註

前編目次

光明藏三昧 大智法話 二十三問答 鷲山和泥合水集 一休法話 不動智神妙錄 毀眼法語 月舟夜話 莫忘草 三昧供養 三師依增語 要鏡 十二時法語 拔隊法語 月庵法語 一休餘骨 盲安杖 無雖法語 卍庵法語 四來法語 行乞寫 岸江小話 身知夢 白隱法語 寶鏡 寫記 辻談藪 誠殺生法語 道羅天釜 夜船閑話 粉引 合計拾部

本書は曹洞臨濟黃檗三派古德假名法語の精を擇び萃を拔きたるものにて丁寧親切に註釋を施したれば誰れ人も容易に了解するを得べし、禪家の僧分は勿論、世の學者軍人敎育者實業家老人婦人小兒よりして、耶蘇敎者に至るまで、皆一本を供へて幽遠高妙なる禪的思想を涵養すべし。

森大狂居士校註

**續禪門法語集**(四版) 總クロース仕立 洋裝美本 一冊 定價二圓五十錢 送料十二錢

校補點註

後編目次

第一日課經要目 三歸戒 般若心經 消災咒 回向文 大悲咒 大悔文 含利禮文 普回向 觀音經 訓讀心經 甘露門 施貪咒 致會列 忘名開經 第二日課經 第三修證 讀觀文 普回向 讀誦經 禮佛 讀誦經 第四吾人之信仰 別錄 高僧承陽大師略傳 大山永平寺略緣起 以上

本書の前編を讀みたる者には、此續編を勸むることを憚らざるなり。江湖の諸士既に大喝采を以て前編を歡迎せらる、其の眞價の存するは、知つて讀者諸士の能く知らるる所、我等敢て贅言を費さざるなり、請ふ其前編と共に愛讀し給はんことを。

松崎覺本師編輯

**曹洞在家日課要集**(七版) 定價十錢 送料二錢

訂正增補

目次

鷲峰山和泥合水集 草鞋 大梅山夜話 正眼國師 假名法語 峨山禪師假名法語 生禪師假名法語 佛丸方書 ほの見性成佛 ぼくれ草 大智禪師法語 水鏡目 白隱ちよぼくれ 澤水禪師法語 御代の馬鹿 聖一國師假名法語 大應國師假名法語 明峰禪師假名法語 寶鈴 盤山禪師假名法語 枯木集 大道禪師假名法語 反古集 快馬鞭 蛇いちご 海指針 合計三十一部

本書は性海慈船禪師が臨み慈に應じて受戒入位○本證妙修○修證不二○國王の恩○平人禪話等深遠なる洞門の眞義を啓き專ら時勢に投じて既破し、最も平易且適切に訓示せられたるものを集め、平易に領解し、得たるものなれば何人と雖○宗の安心起行の理を容易に領解し、得ら

若生國榮師白島勘芳師編

**森田悟由禪師法話集** 定價十錢 送料二錢

目次

本編は專ら在家の日用行持に備へたるものにして、別錄も併せて、附記しあれば、在家一般讀經の便を得ると共に、祖師及び本山等の事柄をも知ることを得べん、而も總て振假名を施したれば、老幼男女を問はず、讀師し得べき、備便なる耳書なり。

るるも、恐らくは本書に如くものなかるべし、謹ふ試に一本を求めて自己の安心を確定せよ。

釋宗演師著

**●靜坐のすゝめ(版六)** 定價三錢 送料二錢

鎌倉圓覺寺管長釋宗演禪師、時勢に感ずる所あり、青年の品性修養に向つて萬斛の熱涙を注がれたる一端なり。書中能く修養せんとする者の心得坐り方、坐りし後の心得等を說く老婆親切なり。苟も參禪修養に志す者の必讀すべき良著たり。

釋宗演師著、棲梧賓嶽師評釋

**●靜坐のすゝめ(再版)** 定價二十錢 送料四錢

評釋

鎌倉の大和尚釋宗演禪師の著たる「靜坐のすゝめ」に對して、實に痛快なる評釋を加へたるもの即ち是れなり。現時參禪に志ある青年若流にして此快著を見ば、炎天酷暑に氷塊を嚙むの感あらむ。

曹洞宗務局編

**●修證義說教大全(三版)** クロース上製 定價八十錢 本金文字入 送料八錢

本書は曹洞宗說教の模範を示したるものにして、本證妙修四大原則等の綱要上下二席本文說教三十一席を收む、文章は固より通俗談話體にして、文字平易、語呂流暢なり、因緣譬喩卑近にして、而も適切なれば、何人も此一卷を以て自由自在に布敎すべく、老幼婦女も一讀の下に安心立命を得ん。

若生國榮師著

**●活禪談(五版)** 第一集 定價二十五錢 送料四錢 第二集 定價二十五錢 送料四錢

平易通俗

本書は禪に關する論說史譚等に就て修禪の方法を說き、古德先哲の參禪鼓唱せし概況を示し、批評を下す殊に師が殺佛殺祖玄機と超凡脫聖の卓見とを以て禪機を弄し、破邪顯正、放把縱奪の自在なる人をして驚歎せしむるものあり。然れば人も商人も僧侶も俗人も、苟も斯道に志あるの士は必ず本書に就き、以て其平生を輕快にせらるべし。

山田孝道師著

**●殺活自在(三版)** 定價廿五錢 送料四錢

禪門戰錄

本書說く所、禪、儒、道、東西の文學技藝に涉り、近代の高僧偉人、義烈婦劍客俳優三味線禪淨瑠璃語等を取り來つて參禪學道の要訣を示す。附錄として森田悟由、四宗有發山、兩禪師の參禪、等數節を收む。一たび之を繙けば慨然書卷を忽にして、抱腹絕倒、讀み去り讀み來りて興味津々たるべし。發えず生死の關を透脫し、活世界に處して活導樂を成すべき活文字を以て滿さる。

後藤北溟師著

**●修養禪話(二版)** 定價二十五錢 送料四錢

本書は古今大禪定家の參禪學道の要訣、百行、逸話等を網羅し、くせるものなり。文辭平易にして頗る面白く、世の禪話中最も趣味多き者たるべし。一辭一句皆是れ金振玉聲ならざるはなく、一讀再讀轉た感奮に堪へざるものあるべし。苟も志を禪に傾け、思を人格の養成にかくる者は請ふ來つて之を繙け、而して又剛健不拔の氣を養ひ、以て生死岸頭遊戲三昧たれ。

若生國榮師著

**●單刀直入(三版)** 定價廿五錢 送料四錢

禪學正門

苟も社會に處して活導樂を爲さんとする者は、須く地球を戰りて手球に打つの大手腕大膽力なかるべからず、之れが修養は單刀直入的禪定に如く者なかる可し。本書說く所平易にして且つ面白く、詳細に修禪の方法を示したるものなり、故に初心の人と雖も一讀の下に高妙幽邃の禪味を咀嚼し、大悟見性の佳境に達することを得可し、謹ふ一讀を賜はれ。



田中仙樵著

**●茶禪一味(二版)** 定價二十五錢 送料四錢

茶と禪との關係は何れに在るか、茶人は禪味を知り、修禪者は茶味を解す。然れども修禪者必ずしも茶味を解するに非ず、茶人必ずしも禪味を知るに非ず、本書を讀む者初めて兩者一味無則なるを悟らむ。本書は前篇に禪を哲學的に說き後篇に至つて茶を論じ、奧茶法語集を附し、以つて茶禪一味の旨を明示せり。文字平易全文絲振假名を附す。

原僧運老師著

**●一味の禪旨(二版)** 全一冊 定價二十五錢 送料四錢

一度此世へ生を受け來つては貴賤高下を論ぜず、死を免かるゝものなし。乞ふ讀者此書を座右に備へ、命根歸着の研鑽に怠りなくんば、我と我心に粒々として自然と興味を覺え行住座臥にして、宇宙の大原理を啓發して、常に證昭々靈々たる境界に接忍し、且つ命根の歸着の際に至つては、杖となり柱と爲りて、吾人の爲めに安心立命の基礎を得ること疑なからむ。

釋宗演禪師著

**●一字不說(新刊)** 全一冊 定價五十錢 送料六錢

教外別傳不立文字は禪宗の一本枝なり。本書は鎌倉の宗演老禪師が、此一本枝を振り廻しつゝ、大音獅子吼せられしもの數十則を收む。故に題して「一字不說」と云ふ。百々句々禪見を離脫して而も老師獨占の妙音を傳ふ、「定味津々たり。禪機を尋ひ修養に志すの士は須く此妙音に接し、進に老師心中の或物を把捉せよ、世尊の拈華、阿難の微笑蓋し這裡に解するを得ん

勝峰大徹禪師著

**●禪と長壽法(二版)** 全二冊 定價五十錢 送料六錢

人間の壽命は、最も完全せる衞生法に依りて二百歲まで生存し得べしとは、泰西醫士の認容する所なり。今禪の修養により、精神的方面より長壽を保ち得べしとは、曾に著者大徹禪師の說たるのみにあらず、古來の秘傳秘法なる所の神傳秘法を詳述して餘蘊あるなし。若し夫れ經下此書を讀まば、藤を叩いて開悟する所あるべし。

原僧運老師著

**●禪學早わかり(三版)** 全一冊 定價四十五錢 送料六錢

著者は今自經と稱せらるゝ禪門の大家にして、風流洒落の間に高尚なる禪理を說くと雖も妙を得たり。本書は小六ツ四敷き禪書に過ぎざるも、和歌あり、謠あり、論評あり、實に趣味豐富一讀するに面白く、讀過既に卷を擱るも、復び卷頭に還つて讀ましむるの力あり、而も其間深遠幽邃なる禪理を、容易に捕捉し得べし、實に「禪學早わかり」の題目人を欺かざるなり。

足立栗園居士著

**●偉人參禪錄** 全一冊 定價六十錢 送料八錢

史上偉人傑士と稱せらるゝもの、如何に其の平生を修養せしか、是れ本書に最も詳かに記述せる所なり、即ち第一編は上流悟道錄として上流者參禪悟道の事蹟を述べ、中編は武士參禪錄として、武士の參禪の逸話を掲げ、下編は三教一致錄として、聖賢開悟の要訣を說く、是れ偉人傑士の平生を修養せし實況の要訣を說く、又一の精神修養史讀たり。

## ○淨土眞宗の部

齋藤唯信師講述

**●無量壽經講義(新刊)** 和裝一冊 定價七十五錢 送料八錢

無量壽經は淨土三部經の一にして、淨土念佛門の敎義之れに依り

て起る。古來此經典を讀述する者甚だ多しと雖、未だ曾て本講義の如く膠新なるものあるを聞かず。本書は講義の形式に一新生面を開きたれば、現今科學的教育を受けたる者の頭腦に適すること疑を待たず。而して本經は阿彌陀如來成佛の因果と衆生往生の因果とを説くものにして、淨土眞實經なり。又淨土教を興出せしめたる、淨土教根本法輪なり。苟も志を念佛門に懸くる者にして、本經を知らざれば、彌陀絶待の救濟に逢ふこと能はず。請ふ一本を供へて彌陀招喚の聲を聞け。

島地默雷師講述

## ●觀無量壽經講義（新刊）

和裝一册　定價六十錢　送料六錢

觀無量壽經は無量壽經と共に淨土三部妙典の一にして、又缺く可からず。古來淨土門の信仰を說く者、競ふて此經を讀ずと雖も、默雷師の眞價を發揮したるは、支那唐の善導大師あるのみ。今島地默雷師善導の流に於て、懇切可噫に講述せらる。抑も此經典たるや、印度王舍城に於ける悲劇によりて其發は開かれたり。一經の主人公は頻婆羅王の妃韋提希夫人にして、夫人は惡太子阿闍世の爲めに幽閉せられ、愁憂憔悴、耆闍崛山に向つて釋尊を請ず、釋尊乃ち來りて說くもの此經典なり。故に婦人救濟の教は本典を外にして他に求む可からず。

吉谷覺壽師講述

## ●阿彌陀經講義（新刊）

和裝一册　定價三十錢　送料四錢

阿彌陀經は又淨土三部經の一なり。大經觀經を讀む者、必らずこの經典を讀まざるべかず。四方極樂淨土の有樣本典に於て詳なり。地獄極樂の有無疑ふべき世界を徧覆す。先づ本典より入らざるべかず。六方諸佛三千大千世界を徧覆すべき廣長舌を出し誠實の言を以て、汝等衆生當に是の稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信ずべしと證明し給ふ。三經各其宜顯する所ありと雖も、又一致する所あり。吉谷講師此邊の義を闡明すること、頗る明快、斯道研究者を導くこと所なり。又其講義の體裁に就ては、本館殊に誇とするなし。

齋藤唯信師著

## ●三經の大綱（再版）

全一册　定價二十五錢　送料四錢

淨土教は無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經の三部の經典に基きて起れる教なり。此三經の大綱要領を適意的に敍せるもの即ち本書なり。三經には其義理の上に於て差別する所あり又一致する所ありと雖も、本書は明快に其脈絡系統關係を說示し、橫說豎說自在無礙に說破し得て些の遺憾なきなり。苟も信を淨土教に樹つる者は、必讀必携すべき良著なり。

文學博士　南條文雄師講述

## ●梵文阿彌陀經講義（二版）

定價四十八錢　送料六錢

淨土三部妙典の讀一たる阿彌陀經の內容は、極樂淨土の眞相を說き、阿彌陀佛の名號を稱し、一唱念佛往生極樂の功德利益を述べ、六方諸佛の異口同音に證誠し給ふことを示す等にあり。茲に梵學博士南條文雄氏此經の梵本を取り、其の梵本の上より本典の實價を發揮せらる。世の梵學に志ある者の、漢譯阿彌陀經と比較研究する好資料たる可し。

道重信敎師講述

## ●淨土往生論講義（新刊）

和裝一册　定價四十錢　送料六錢

「淨土往生論」は印度の論主天親菩薩の著なり。抑も西方淨土の思想は、馬鳴龍樹等の論師によりて唱へ出だされたりと雖も、未だ斯の如く組織立てたる者なし。本論は淨土三經通申の論とも稱し、或は又別中大經とも謂はるゝ論本なれば、無量壽經の縮寫とも觀るべき書にして、淨土念佛門に在りては、三部經と併せて三經一論と云ひ、缺くべからざる寶典なりとす。

齋藤唯信師著

## ●七祖の大綱（一版）

定價四十五錢　送料六錢

七祖とは淨土教祖にして、印度の龍樹、天親、支那の曇鸞、道綽、善導。日本の源信、法然なりとす。孰れも釋家の龍象にして、而も淨土教々理上に於て、各其說を發揮す。故に七祖は淨土念佛門に於ける母なり。今や齋藤唯信師、七祖の說を比較對照し、縱說橫說自由自在なり。其間自から一種の新機軸を出す。平易簡明、何人も容易に了解し得るの一事に至つては敢て贅言を要せず。

香月院深勵講師講述

皆往院頓慧講師講述　小栗栖香頂校閱

## ●眞宗教行信證講義（再版）

和裝十册　定價八圓五錢　送料三十二錢　帙入

眞宗教行信證六卷は淨土眞宗の開祖親鸞聖人、立敎開宗の爲に著作し給へし聖典なり。然れば眞宗の教義一切收めて此中に在りと雖も、深義窺ひ難し。眞宗の泰斗、香月院深勵講師亨和三年教行二卷を講じ、文化二年信卷を講ず、惜むべし、證卷以下に手を付け給はざるなり。依つて皆往院頓慧講師の講義を以て、之れを補ふことゝせり。兩師の講錄何れも寫本とし、仰ふるのみなれば、其正本を取つて殿密に校訂を加へ、本館進んで眞宗のために上梓せり、古來未曾有の一大寶典なれば、其講義亦未曾有の講義なり。請ふ一本を座右に供して、四法の宗義を究め、一宗の針路を明にせられんことを。

皆往院頓慧講師講述　小栗栖香頂校閱

## ●教行信證眞佛土化身土卷講義

定價五圓五十錢　送料十六錢

夫れ淨土眞宗は、教行信證文類六卷に依りて開立せられたり。教は即ち眞實の教にして行は他力回向の大行なり、行に依りて他力信心を獲得し、信を由て証に證を得る。證は即ち眞佛眞土に於て成就す、之れ眞佛土卷の證卷に次ぐ所以なり。眞實に對して又方便あり、方便に亦教行信證あり、方便の證果は即ち方便の化身化土に於て得るものにして、化身土卷の眞佛土卷に次ぐ所以又茲に存す。本書は前の教行信證講義と合せ、眞宗御本書の講義手に完結す。實に前未聞古今の珍書なり。其講義親切可噫にして、一文一句を殘さず精細に講述せらる。蓋し斯の如き珍本は決して他に求むべからざるなり。眞宗の僧俗共に一本を供へて、報恩謝德の誠を盡されんことを希望して已まず。

文學博士　前田慧雲師講述

## ●正信偈講義（五版）

和裝一册　定價十七錢　送料四錢

正信偈は淨土眞宗の開祖親鸞聖人の著作にして、「教行信證」行卷中に收めらる。即ち其前半は大無量壽經に依り後半は七祖の聖教に依り、正しき信仰を勸むるために述べたまふ偈頌なり。古來此講本多しと雖、或は繁に失し或は簡に過ぐるを遺憾とし、前田博士能く中庸を守り穩健なる既を選びて、講述せられしものなれば敎家の一日も缺く可からざる寶典なり。

文學士　近角常觀師講述

## ●歎異鈔講義（刊）

和裝一册　定價六十五錢　送料六錢

此書は眞宗の開山親鸞聖人の、熱烈なる信仰を告白せるものなり。聖人が絕待他力の信仰は、金剛よりも堅く、「タトヒ法然上人ニスカサレマイラセテ念佛シテ地獄ニオチタリトモ、サラニ後悔スベカラズサフラフ」として念佛を信じ給ふ信念實に仰ぐべきなり。而も近角學士また熱烈なる信仰を以て、本書を講ぜらる。世の煩悶者、求道者共に來つて此の靈の如き法を聽き給へ。

伊藤哲英師講述

## ●改悔文講話

全一册　定價十五錢　送料二錢

此改悔文は淨土眞宗の中興蓮如上人の遺述にして、文字僅に二百字內外に過ぎざると雖、眞宗の安心法門殘らず此內に藏め盡して缺くる所なし。殊に異解不正の邪義に惑ふて、信實の信仰を獲得せざる者は、執りて以て龜鑑とすべし。然れども本書は義理深遠にして窺ひ難きを以て、久しく求道者の嘆聲を聞く、今や本館其聲に應じて本書を公にす、請ふ一本を供へよ。

織田得能師編

## ●蓮如上人略傳並垂訓

定價五錢　送料二錢

蓮如上人は淨土眞宗に於ける中興の上人にして信仰家中の信仰家

なり、一代唯だこれ布教傳道に力められ、御文及改悔文等の御遺文あり、其傳記又多しと雖も概れ繁冗に渉り其要を得難し。本書は其缺陷を補ひ平易簡明の御傳記にして、附するに聖訓を以てしたり。上人一生の御功德を稱讃し、報恩謝德の念を涼からしめんと欲する者、先づ本書を讀まる可し。（紙ふりがな付にして讀みやすし）

## ○各宗用の部

島地默雷師講述

**●維摩經講義**（六版）和裝一冊 定價五十錢 送料八錢

此維摩經は一名不可思議解脫法門經と名づけ、其主人公は勿論維摩居士なり。維摩居士は在家の信者にして、其智其德の勝れたる通常賢人を以て見るべからず、菩薩文殊と同樣なる表德化現の大士なりと謂ふべし。故に古來の大德萬口一樣に稱讃して法身の大士と崇む。即ち此經は維摩病劍にして佛弟子を慰問し、却つて居士の爲に論伏せらるゝに起り、一經通して我見の束縛を離れたる妙理を詮顯するにあり。其講義の懇切可愛なる敢て賛賞を致さゞるべし（全紙二百五十頁）

大內青巒居士講述

**●四十二章經講義**（二版）和裝一冊 定價二十五錢 送料四錢

此經典は印度より支那に傳來せし最初の經典にして、又最初の飜譯なり。而して本經は浩翰なる佛經中より、其精髓を抽き出して四十二章とせしものなれば、「佛敎とは如何なる宗敎か」の問に能く答へたる經典なり。而も大內居士平易に之を講じ、全文懇振假名を施す、萬人は萬人ながら、之を讀みて領得すべし。故に本館は初て佛敎に入らむとする人に勸むること切なり。

大道長安師講述

**●觀音經講義**（新版）和裝一冊 定價七十五錢 送料八錢

此「觀音經講義」は、大道長安師一代に於ける最後の說敎にして、同師は此講義を終へて間もなく、圓寂せられたり。然れども本講義は法華經第二十五普門品を則出したる經典なれども、觀音大士の救濟力に若眼したるは、實に同師の卓見にして、同師の妙力門敎世敎は、此經に據りて開立されたるものなり。

白隱禪師著

**●延命十句觀音經靈驗記**（半紙版 和本二冊）定價五十錢 送料六錢

本書は如何こ斯道に取りて有益なるかは、南隱老師の序文を以て知ることを得べし。曰く「吾白隱老師寶曆の頃橫說縱說の際、齋く細業をして此延命十句經を信取せしめたまひしに、其感應勝て計ふべからず、師曾て手自ら漢土及當時の靈驗を出し剖刊氏に命じて世に行はせ給ふ、寔に永世の作程長翼の示範なるものと云ふべし」と以て其珍重せらるゝと明也。

文學士澤柳政太郎著

**●訓譯佛遺敎經**（本經は大聖釋尊の、いよ〳〵御臨終といふ時に、苦口丁寧に御遺誡せられた御經なり。この大慈大悲の御敎誡を拜誦して、誰にも敎順心の報謝に回向し得る機にとて澤柳學士が懇切に和譯せられたる寶典なれば、施本傳道用として頗る適當なり。）定價五錢 送料二錢

山田孝道師講述

**●佛遺敎經講義** 和裝一冊 定價三十錢 送料四錢

本書は其標題に顯はれたる如く、釋迦牟尼如來一代の敎化を終へ、將に入滅せらるゝに先だちて、遺弟のために觀法せられし所の經典なれば、佛一代說敎の結經とも謂ふべし。故に其說く所人天乘の心得として、大乘至極涅槃常住の旨に及び、巾狹くして谷深く、文字僅かにして意義廣き經典なりとす。



釋雲照律師著

**●訓譯十善業道經** 定價五錢 送料二錢

本經は十善業道經を訓譯して讀み易からしめたるのもなり。釋迦如來娑竭羅龍宮に於て、龍王の爲に善因善果、惡因惡果の根本因果律を說き、十不善業に對する惡果の恐るべき、十善業に對する善果の忽むべきを說く、之れ本經の大旨なり。卷頭に釋尊の密意を挿入し、且つ讀經につきての作法を添ふ。施本用とするも亦甚だ可なり。

釋雲照律師著

**●十善業道經講義**（新刊）和裝一冊 定價七十五錢 送料八錢

此經は釋尊娑竭羅龍宮に於て、龍王の爲に說けるものにして、佛敎の因果律を立脚地とし、十不善業には十種の惡報なる果報を受け、十善業には十種の善妙なる果報を獲て、福德無量無邊なることを說けり。而して律師今や寂を示すと雖、本譯義を讀む者は、老幼男女を論せず、而前生りる律師の德音に感ずるの感あらむ。而も其譯義平易懇切なるを本書の特色とす。

文學博士 前田慧雲師著

**●那先比丘經提要**（新刊）和裝一冊 定價四十五錢 送料六錢

「那先比丘經」は今より二千餘年前に於て、希臘領バクトリヤの領主メナンデル大王が、北方印度佛敎國の俊才たる那先比丘を請し、宮中に於て佛敎の要義を問答したる卓越の集錄なり。而して那先比丘の應答は、一も那先の私見を加へず、經律論の三藏に據りたるものにして、其の譬喩の巧妙なる、其の論議の卓越なる、實に高尙なる哲理なる、能く平易に論述する所、露くに堪へたり。此經典英譯して東方聖書中に收められたり。前田博士英漢相對照し、以て其の經典中の要義を提示せられたるものなれば、趣味寔に深し、敢て一讀を勸む。

若生國榮師講述

**●父母恩重經講話**（二版）定價十錢 送料二錢

若生國榮師、我邦現時の風俗が泰西物質的文明の進化に伴つて、我邦固有の道德たる忠孝の美風、日に月に廢頹するを奮慨し、佛典中より此父母恩重經を選び、公衆の爲に懇切に講話せし者即此講話なり。本文は之れを和譯し、全文に振假名を施したれば、何人も難なく讀み易く解し易し。故に本書を廣く施本用とし、普く世に流布せしめられんことを希望する所なり。

織田得能師講述

**●八宗綱要講義**（三版）菊クロース一冊 金文字入一冊 定價一圓三十錢 送料十二錢

本書は南都東大寺の大德凝然師の著作にして、古來各宗學林間に於て敎科書として採用せらる。師の文元來華美にして、文章として觀るも既に價値あり。其收むる所實に俱舍宗○成實宗○律宗○法相宗○三論宗○天台宗○華嚴宗○眞言宗の八宗にして、其要義を欠くる所なし。凡そ佛敎々理發達の跡を研究せんと欲するの士は、本書の如き簡要なるものに依らざるべからず。而も織田得能師、詳細に本書を五百有餘頁に譯述せられたれば、些の困難なく八宗の宗義を通解するを得ん。

齋藤唯信師講述

**●俱舍宗大意**（合本二版）定價六十錢 送料六錢

**●三十唯識論講義** 定價六十錢 送料六錢

俱舍論三十卷ありて世の佛敎學者の必ず研究すべき典籍となす。此論に依りて開立せし俱舍宗と云ひ、一宗の敎義を組織せり。之れ佛敎々理の基礎にして印度哲學の權一たり。故に此義に通ぜざれば、未だ以て佛敎を論ずの資格なしと謂ふべし。本書は即ち俱舍學の捷徑、萬人必讀の書なり。唯識の敎義また印度哲學の一にして、俱舍哲學と全く其趣を異にせり。本書は即ち三十唯

識論を講述せしものにして、三十唯識論は、唯識三十頌を通釋したるものなり。然れば俱舍哲學唯識哲學兩々相對して研究する、又興味あるにあらずや。

織田得能師講述

## ●七十五法名目講義(三版) 和裝一册 定價六十錢 送料六錢

七十五法名目とは、俱舍哲學に於ける、重要なる學術語七十五語を云ふ。此七十五法の名目術語に熟徙すれば、自ら俱舍哲學の組織内容に通曉するを得べく、進んで佛教經論を讀むに當り、其術語に苦むことなく、容易に諸經論の意を掬するを得べし。故に佛學に入らんと欲する者は、先づ此の書を選ばざるべからず。殊に織田得能師の叮嚀親切なる講義を勤むること切なり。

文學博士村上專精師講述　池原雅壽師講述

## ●因明學大意
## ●因明三十三過本作法講義(合本再版)

定價三十八錢　送料六錢

因明學は印度哲學中の論理學にして、釋尊を初め、十大弟子以下諸論師に至るまで之を應用して外道諸破の既を破し、以て佛教の眞理を顯する。爾來因明學は佛教中のものとして遺り、佛教學者に依りて研究せられたり。茲に因明學の泰斗たる村上博士、初學者の爲めに其大要を講述せらる、亦以て斯學界の指針たるを可し。○因明の論理は成立せず、故に其過失を研究して其正しき作法論式を犯すも論理は成立せず、故に其過失を研究して其正しき作法論式を犯して不正なるもの三十三過あり、其一過を取らざるべからず。本書は即ち其目的に依つて作られ、其講義式も亦精細親切なり。

釋慶淳師講述

## ●即身成佛義講義(新版) 和裝一册 定價五十五錢 送料六錢

草木國土は飽くまでも草木國土なりと見るは迷見にして、迷悟の二ありとするも、亦之れ迷見なり。煩惱と菩提と差別し、佛身と凡身と隔歴するも、亦之れ迷見なり。而して一切差別の迷見を破却するは、實に眞言宗に於ける即身成佛の福音なりとす。殊に本書は草木國土悉皆成佛の旨を明にし、即身成佛の義を示せるものなれば、眞言秘密の深旨を知るに便なり。

文學博士　村上專精師著

## ●佛教概論(新版) 和裝一册 定價七十錢 送料八錢

三千年の歴史を有する我が佛教々理は、之れを歴史的に縦に研究するの必要あると共に、又各宗の教理其のものに就きて、横に比較的研究を試むるの必要あり。本書は即ち各宗の教理を眼前に陳列し來り、之れを抽象し、之れを概括し、佛教の歸結する所と論究し、或は當り、或は逆意的研究法に依り、或は歴史的研究法に依り去り、或は比較的研究法に依り、或は批評的研究法を用ひて、論じ來る所、縱横自在、無碍圓通して、實に痛快なり。文辭また博士得意の平易文にして、何人と雖も讀み易く解し易きを以て、本書の特色とする所なり。

織田得能師著

## ●佛教大意(五版) 全一册 定價二十錢 送料四錢

我邦現在の佛教は實に十三宗三十六派あり、其教理より見れば顯教あり密教あり、自力教あり他力教あり、各其所立を異にし、其道を別にす。然れば初學者は勿論、少しく斯道に入りし者と雖も「佛教とは何ぞや」の問に窮困すべし。本書は即ち其要求に應じて出てたるものにして、而も平易なる問答體を以て叙述し、能く通俗的に詳說せしものなり、請ふ一讀を怠る勿れ。

織田得能師著

## ●佛教金言集(三版) 總クロース金文字入 一册 定價三十五錢 送料六錢

本書は浩瀚なる一切藏經、大乘小乘諸經論中より、倫理、信仰、及哲學に關する聖語を蒐集して編纂せるものなり。然れば則ち此書直に一切經にして、一切經は此一卷中に於て看るを得べし。而も一語毎に訓讀を施して通解し、總べて振假名を附したり。苟も精神を修養せんと欲する者は、學者も學生も男子も女子も、實業家も農業家も、番頭も小僧も、凡そ假名文字を讀み得る一切の人は、必ず一本を備へて座右の銘とせられよ。

文學博士　村上專精師著

## ●大乘佛說論批判　全一册　定價五十錢　送料八錢

大乘佛說非佛說の論爭は、實に佛教界に於ける一大波瀾にして千古未決の問題なり。茲に村上博士印度支那及我邦諸家の、此問題に關する見解を叙述し、一々之れに痛快明晰なる批判を下し、一刀截斷の下に紛然錯綜せる此大問題を解決せり。加之博士の的確なる考覈と峻明なる論斷とに至つては、近來未聞の快文字たり、希くは斯道に志あるの士速に一本を備へよ。

山田孝道師著

## ●佛教のすゝめ(四版) 總クロース金文字入 一册 定價五十錢 送料六錢

本書は山田老師が東西古今の教理學說事實を引き來り、親切平易に繰述して、佛教をすゝめられたる書なれば、殊に新式說教演說を試むる者に本書を勸むるや切なり。今目錄數十項中より二三を摘出せば、○釋尊は萬德圓滿の大聖○佛教の慈悲は耶蘇の愛より廣大○諸佛の淨欲と凡夫の貪欲○大黑天の解釋○處世堪忍十種○地獄極樂の疑問○往生淨土等。

鷲尾順敬先生著

## ●日本佛家人名辭書　四六二倍大判　總クロース金文字入　一册定價九圓　送料冊錢

○日本佛教沿革略○各宗系統圖○佛工系圖○諸宗問跡歴代○諸大寺並諸職歴代○位階官職一覽○勅號勅諡索引○異稱略名索引○名數索引○島出家年表○各宗高僧年表○各宗高僧肖像○宗派分類索引○本文(六千五百餘人群僧)○首字字劃文類索引

内容

## ○哲學及雜部

紹慶密應師著

## ●佛教哲學新論(新版) 總クロース金文字入 一册 定價二円 送料十二錢

世人四洋哲學を崇拜すれども、佛教々理中既に四洋哲學以上の論說あり。著者即ち茲に見る所あり、佛教々理を自由に抽出編輯して佛教哲學新論と題す、即ち第一篇に於て佛教認識論を說く爾る第二篇に至つて形而上學論を述べ萬有眞相の本體を顯せり。然れば未だ佛教の哲理を知らず、徒らに四洋哲學に醉ふ者、本書を一讀せざれば恥を後世に遺すべし。

文學士　有馬祐政先生著

## ●日本哲學要論(新版) 全一册 定價七十錢 送料八錢

本書は和漢の高僧傳にして、凡そ一宗一派の開祖は勿論新機軸を出し新說を吐き、德行高く顯はれたる高僧大德は悉べて收めて此中にあり。織田得能師殊に漢文に意を注き、編輯せられしものなれば、各宗中學林の教科書として最適切なり。

織田得能師編纂

## ●和漢高僧傳　和本三册　定價六十錢　送料六錢

本書は浩瀚なる一切藏經、大乘小乘諸經論中より、倫理、信仰、及

本書は古來日本に現出したる一切の思想を網羅し、其思想の由來を究め、比較評論したるものなり。即ち日本神道儒及佛教は日本の思想界を動かしたるものにして、之れが哲學的研究に加ふるに、泰西諸哲學との比較對照は、實に興味深き所とす。若し一度本書を繙かば、本邦思想界の大勢を知ると共に、又以て新思想界を如何に發展せしむべきかの覺悟を得べし。

文學博士　元良勇次郎先生著

## ●教育と宗教との關係(三版)

定價送料共十五錢

教育と宗教との關係に就ては、學者間未だ論議一定せず。殊に文部省の訓令出て、學校に於ける宗教的儀式を斷然排除するに及び、此問題復び學者間に沸騰し、是非紛々亂麻の如し。茲に文科大學教授元良博士、夙に倫理哲學に精通し、慧々たる該問題を提へ來りて、一刀兩斷に解決せらる、一讀痛快なり。請ふ宗教々育の事に從ふ者一本を供へて其針路を明にせられよ。

釋雲照律師著

## ●日本國民　教育の本義

全一冊　定價三十五錢　送料四錢

夫れ國民教育の精神は國民の本性に適し、國體の精華を益發輝せしむるにあらざるべからず。現下道義頽廢の時、正確なる考察を以て歷朝聖王の遺訓に基き、道義の根底を開發し、卓絕なる立論を以て世の墮落界理に一道の光明を放ち、大に教育の改進を圖かられたるもの即ち本書なりとす。著者は之れ一大宗教家なれば、亦大に其論鋒を異にす。

高田道見師著

## ●佛教人生論(三版)

總クロース金文字入　一冊　定價二圓三十錢　送料十二錢

本書は佛教の大原理に照して、人生の本末即ち我が生れぬ先の事より死し行く先きの事迄を詳かに說きたる一大名著なり。是れ人生古今の一大問題にして、此問題を一刀裁斷に解決せる近代の快文字なり。苟も我人類社會に生を享くる者は必ず一讀して、其生れて來る所を知り、死して去る所を究めざれば、日々の活動も無意味に了るべし。請ふ一本を供へよ。

齋藤唯信師著

## ●佛教倫理大觀(二版)

全一冊　定價十二錢　送料二錢

佛教倫理學は佛教倫理なる一切經中に散在せる說にして、古來未だ之を組織的に系統づけて說きたる者無し、茲に著者大に感ずる所あり、一切經を涉獵して佛教倫理概論を試みられ、この混濁せる社會に興奮劑として投ぜられたるものなり。然れば教界に在るの士は勿論世の教育家と雖も、東洋倫理として之を讀まざるべからず、文辭平易にして萬人讀み易し。

山岡鐵舟居士口述
勝海舟翁評論　安部正人先生編纂

## ●武士道(七版)

全一冊　定價三十五錢　送料六錢

『帝國文學』第八卷第三號に本書を批評して曰く、明卷第一先づ戰容儼然威風堂々として人を壓する偉人の肖像を見る、これ幕末の遺臣故山岡鐵舟翁也。本書は實に翁が武士道に對する考を種々なる點に發揮し、其閱歷に顧みて詠々として說き、誦讀の際覺えず啓發する所あり。加之海舟翁の評論ありて、互に相照映し奇機よく人の肺腑に徹透す、非凡なる兩偉人に對する讀者が長敬の念既に十分心眼を開かしむるに足るべく、世上ありふれたる抽象的議論に勝る萬々也、日本國民たるもの是非一讀すべき價値ありと信ず。

揖東正彥先生編

## ●海舟言行錄(十版)

全一冊　定價六十錢　送料八錢

維新創業風雲に江戸城を保全し、島原萬歲の基礎を築き、能く南洲翁鐵舟等と共に悠々大事を決せしもの即ち安房勝海舟居士とす、居士は天縱の大器を以て、克己修養卓機を應用して武を說き文を講じ事に當る。今茲に居士の記錄講話遺事詩文等を收めて本書に編輯す。夫れ幕末一個人の片影を知らんと欲し、又遙んで精神修養に志すの士は是非常に一本を座右に供せよ。

海舟居士評論　安部正人先生編
泥舟居士校閱

## ●鐵舟言行錄(三版)

全一冊　定價六十五錢　送料入錢

山岡鐵舟先生は禪學に於て又劍道に於て、稀有の英傑にして、其言行は以て人格訓錄の師範たり。本書は先生十五歲より晚年に至る言行を輯めたるものにして或想あり記錄あり、批評あり議論あり。殊に海舟先生の奇警評語を併せ掲げたれば、幕末に於ける一忠臣の紙面に躍如たるを見るべし。苟し禪と武との兩面に趣味を有するものは必ず之を繙かざるべからず。

前大學總長理學博士山川健次郎先生述

## ●學生諸君に告ぐ(再版)

定價五錢　郵稅二錢

博士が天下幾萬の青年學生諸君の爲めに諄々青年者五戒と題する青年諸君に說示せられたる青年調である之れ青年學生社會の日々意志の惰弱に陥くを慨ぜられ之が救濟せんが爲め特筆せられたる近來の大文字である是れ青年學生への贈物には最も絕妙のものなり。

釋悟庵師著

## ●禪と武士道(三版)

全一冊　定價四十錢　送料六錢

夫れ禪は武士道なり。而して大和國民の精華たる武士道を說き、其因緣沿革を說ける近來の珍書なり。其要目は禪武士道の大意○禪武士道の處世觀○歷史上より見たる禪と武士道○武士道○禪と古英雄○偉人の臨終等にして全篇悉く膽力修養の好資料たり。

法學博士男爵田尻稻次郎先生著

## ●新體琵琶歌(再版)

正編定價十五錢　郵稅二錢
續編定價十二錢　郵稅二錢

薩州の偉傑田尻博士日に人心の惱弱に陥るを慨し、義憤の念にから れ戰慄國民の志氣を鼓舞せんとて心血を濺き作られたるもの、若し夫れ是れを絃上に上さんか、半月の妙音は世道人心を益し、吟誦一遍せば壯快の念と共に剛毅不拔の志操を練り得可し、乞ふ天下の有志此の韵事遊の趣味を知れ

法學博士男爵田尻稻次郎先生著

## ●琵琶新曲　皿折錄

全一冊　定價參拾錢　頒奬製本　郵稅四錢

田尻博士の琵琶歌は曾て賢處にて四絃半月の妙曲と相和したる光榮ある欽說である是れ今古の人傑を網羅し清新圓熟なる文字もて忠孝仁義の志操を能く發揮せられたる『正氣の歌』である若夫れ此卷を繙かんか深感且つ男壯なる神韻は文字外に迸しり誰か痛絕快絕をさけばざらん琵琶歌を咏なむの士は無論苟も大和民族たるものは常に吟誦して人格の修養と共に男壯剛健の志操を養へ

織田得能師著

## ●國文學十二種　佛語解釋

總クロース金文字入　一冊　正價一圓五十錢　送料十二錢

國文と佛教とは親密なる關係を有し、佛語を解せざれば國文書を讀む能はざるなり。然るに古來此缺陥を補ふの術なく、織田得能師之れを紙上に統一して黃然筆を執り、最も普通に行はるゝ竹取物語○枕草紙○榮花物語○大鏡○水鏡○方丈記○十訓抄○徒然草○今昔物語○拾遺抄○正法眼藏○古事談○十二種に就き、詳細に佛語を解釋し、其出典を明にし、別に熱海引を附したり。故に國文中の主要なる佛語は、殆ど網羅せざるはなし。實に國文學註釋の上に一段の光明を與ふる者と謂ふべし。世の國語教師及學生諸君は必ず一本を座右に供へ給へ。

## ○施本用の部

## ●訓譯遺教經

定價五錢

●訓譯十善業道經　定價五錢

●訓譯原人論　定價五錢

●盆の由來　定價四錢

●施餓鬼の由來　定價四錢

●追善の心得　定價四錢

●靜座のすゝめ　定價三錢

●法の鏡　定價三錢

●世路の要　定價二錢

（部數によ引割りあり御照會を乞ふ）

## ○教科書並參考書類

文學博士　芳賀矢一先生校閲
陸軍教授　友田宜剛先生編述

●中學校用　**作文教科書**　全五冊和製美本　各冊挿畫入

第一卷（九版）　定價二十五錢　郵稅四錢
第二卷（八版）　定價三十錢　郵稅六錢
第三卷（七版）　定價三十錢　郵稅六錢
第四卷（六版）　定價三十五錢　郵稅六錢
第五卷（四版）　定價四十錢　郵稅六錢

苟て中學作文科に初て教科書の必要を唱へて中等教育作文教範を編述せられたる友田先生が其後更に數年研鑽と實驗とを經て全く中學生に適する標秩序を立て頗る難易の度を考へ今迄困難なりし作文教科を容易に適用せしむる樣組ろに作文法、注意、練習法、應用法等に及び一々其文例模範文を掲げ簡潔にして洞すなく一讀其要を得せしむ之れ中等教科作文書として唯一の良書なり

文學博士　芳賀矢一先生校閲
陸軍教授　友田宜剛先生編述

●女學校用　**作文教科書**　全四冊和製美本　國錢

△第一卷（五版）　定價二十錢　郵稅四錢
△第二卷（四版）　定價二十錢　郵稅四錢
△第三卷（三版）　定價三十錢　郵稅六錢
△第四卷（三版）　定價三十五錢　郵稅六錢

本書は友田先生の女子高等師範學校等職中經驗と研鑽とにより秩序を整へ難易の度を考へかり文の分解結合、語句の斷續段落より句讀點、送假名、文字の選び取捨の方法、紀行、日記、書翰、記事、叙事文の用語の注意及詩歌格言の解釋敷行等一々其文例模範文をかゝげ簡潔にして適切と思はる旨とし編述せられたるものにして高等女學校程度の教科書には適切の良書なり

文學博士　芳賀矢一先生校閲
陸軍教授　友田宜剛先生編述

●中等教育　**作文教範**　全五冊和製美本　各冊挿畫入

第一卷（八版）　定價三十五錢　郵稅六錢
第二卷（七版）　定價四十錢　郵稅六錢
第三卷（六版）　定價四十錢　郵稅六錢
第四卷（四版）　定價四十五錢　郵稅六錢
第五卷（三版）　定價五十五錢　郵稅八錢

本書は師範學校及師範講習科並に中學校の作文教科用書とし其採用する所既に六十餘校となれり本書は其作成法を文學上、文典上、並論理、美辭上より詳述し且つ應用法、練習法等有ゆる手段を盡して丁寧懇切に說示したるものにして學生諸君並に教員諸君に取て



は從來の教科書教授書の絶無なりし點を避け得べく又獨習者に取ても必ず攝へざる可らざる良書なり

文學博士　芳賀矢一先生校閲
陸軍教授　友田宜剛先生編述

●軍人教育　**作文教程**　全三冊和製美本

△第一卷　定價廿五錢　郵稅四錢
△第二卷　定價三十五錢　郵稅六錢
△第三卷　定價四十五錢　郵稅八錢

軍人の態度は絶律嚴格を以て最も重しとする處なり亦明瞭ならざる可らず本書は先に中等教育作文教範を著し名を天下に轟かしたる陸軍教授友田宜剛先生今回公命を受て立案せる新奇拔の方法を以て編述せられたるものにて正に斯道の深き文科大學教授文學博士芳賀先生の閲密なる校正を煩したる者なりされば作文の自修用參考書には絶好の書たるを期す

女子高等師範學校教授　四島當藤先生
女子高等師範學校教諭　吉村于鶴先生共編

●**小學裁縫教程**　文部省檢定濟

兒童用（修正改編）　定價九錢　郵稅二錢
第一卷　兒童用（全）　第一冊　定價二十八錢　郵稅四錢
第二卷　兒童用（全）　第一冊　定價二十五錢　郵稅四錢
第一卷　尋常科教員用（全）　第一冊　定價二十五錢　郵稅四錢
第二卷　高等科教員用（全）　第一冊　定價五十錢　郵稅八錢

近來諸種教科書の編述多し雖ども裁縫科に於ける著述甚だ少し個其著なきにあらざるも皆中等以上の教育程度若くは專門に修むる人の爲めに偏にしてあり小學程度に於ける裁縫教授指針となるべきものなし此に書は編者多年職を女子高等師範學校に奉じ地に經驗したる結果に基きて新小學令に依りて編纂せられたり恐然再慎に拘泥して統一なき小學校裁縫科の教授改良に適切有益なる

もの確に小學程度に此科の方針を示すものといふべし兒童服は兒童筆の徒勞を省かんが爲め又教員用は此科教授の方法及注意を說明し又明細なる圖解を施せり特に卷尾に詳細なる教授細目を附錄として教授者の便に供せり

女子高等師範學校附屬小學校編纂

●**教授要項及教授例**（再版）　全一冊　定價四十錢　郵稅六錢

本書は小學校に於ける諸教科の教授方針を明細にして其統一を圖らんが爲めに今般女子高等師範學校附屬小學校に於て編纂せられたるものにして前半なる以ては各教科に對する教授の要項を示し後半に於ては各教科につき標準の場合に於ける教授の實例を示したるものなり苟も小學校に教鞭を採るものは必ず一讀するを要す

I-E6Q-17

# ●●御注文の注意●●

一、「注文」御注文の書籍は前金到着の上ならでは一切送附不申候

一、「代價」書籍代價は郵送料其御計算の上振替貯金、郵便爲替又は銀行爲替其他御便宜に任せ御送の事但不便の地は郵便切手を以て代用あるも不苦候併し此場合には一割増にて申受候

一、「振替貯金」御送金相成候せつは最も安全に凡て手數料爲替料等を要せず無料にて送金出來申す可く候されど振替貯金扱の手續上二三日延着致候に付豫め御含み置被下度候

一、「送本」御注文書籍は注文狀來着の當日若くは二日以内に發送仕候へ即ち本館出版物は其當日より凡二日内)依て郵送に要する相當の日數を經て他店出版物にして取寄の必要ある者は其の日より速かに其旨御通知可有之即ち

一、「剩餘」御送金の書籍代に過剩し若くは郵送料當館にて直ちに取調相當の手續可仕候

當館にては着本無之時は

一、「不足」御送金額書籍代幷郵送料に對して不足を生じ候節は直に其旨通知申上候に付き一々御申越に從ひ可申候

確かに於て自然節約致し候節は其過剩若くは郵送料又は其他の館に流用するか保存し他書に分

知申上候に付直樣御送金可有之若し御送金なき時は之に對する品物相減じ候上にて送本可申或は一品のみの場合には着金迄送本を見合せ可申候

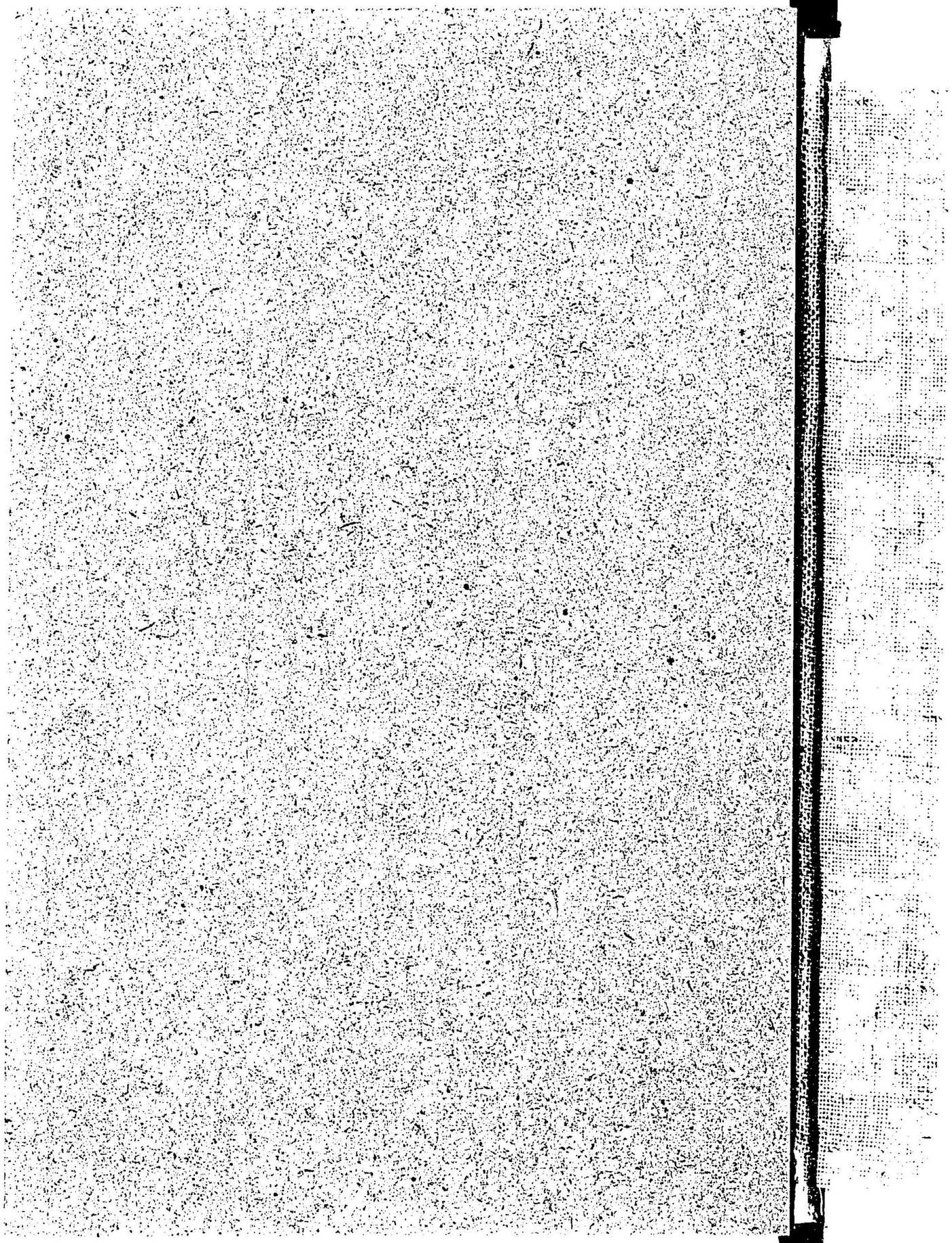
一、「照會」當館に對し書價問合其他の返事を要する砌は郵便切手封入せらるゝか又は往復はがきにて御照會被下度若し右樣無之ものは返事仕らず候

一、「御信書」には御住所、御姓名、等楷書にて明瞭に御記載可有之若し文字不明なる時は從て返事幷に送本も出來かね候次第に付後日御督促あるも當館は延滯の責に任ぜず候

一、「未納稅」不足郵便物は當館にては請取申さず候間御投函の際御注意願度候

一、御書面には要件のみ即ち著者名、書名、冊數、部數、定價何錢郵稅幾錢合計幾價爲替封入又は切手代用と御記入右郵便、又は小包、小包代金引換便、にて送れと御記載相成凡て冗文御省き の程希望仕候

發行所 東京市神田區駿河臺袋町一 光融館
電話本局二九九九番
振替口座東京二三一三番



019726-000-3

324-155

坦山和尚全集

秋山　悟庵／編

M42. 11

ABG-0531